
aiolos

keiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ai olos

【Zコード】

N9070V

【作者名】

keiko

【あらすじ】

離婚した母親と暮らす、ごく普通の少年エンノイアは、ある日、母親の恋人との葛藤から、家を飛び出す。街を走り抜け、川原にたどりついたエンノイアの耳に聞こえてきたのは、「アイオロス」と名乗る、謎の声。謎の声の主は、エンノイアの願いをかなえ、エンノイアの母親を恋人から取り戻してくれるという。そのためには、「アイオリア国」の「ブネウマの鏡」を割らなければならない。エンノイアは謎の光に包まれ、未知の国、アイオリアへと旅立つ。エンノイアはそこで、さまざまな人たちに出会い、数奇な運命に巻き

込まれていく……。

プロローグ 王

「王よ、どうされました？」

側近だろうか。ゆつたりとしたローブをまとつた青年が尋ねる。腰まで伸ばした髪は水色、先のほうで緩く束ねられている。

「この国に闇が迫つてゐる……。新しい王を見つけなくては」

ベールをかぶつた女性が、水晶に手をかざす。ここからではよく見えないが、何かが映し出されたらしい。かぶつたベールから、先ほどの青年と同じように、水色の髪がのぞいている。

「アイオロスよ。ここに映し出す者をこの国へ導きなさい。この国
の新しき王となるべき人間を！」

第一話 選ばれし少年

♪・♪29716—3781♪

不思議な夢を見た。どいかの国の王様が、新しい王を探すのだ。

♪・♪♪♪♪。♪・♪♪♪♪。

「うぬわこな……。

耳元で田覚まし時計がけたましく音をたてている。

♪・♪♪♪♪。♪・♪♪♪♪。

わかつたよ。起きるよ……。

僕は、しきりに落おひとじてくの上まがふたと闘いながら、田覚まし時計に手をのばした。

「……?」

「どうか、ちぐひ下りてこな。

多くの田覚まし時計がそつなよに、僕の田覚まし時計はセツナするときほレバーを上に上げ、止めるときほ下げる、ひとつ仕様になつている。

だが、レバーはすでに下りてこな。なのに田覚まし時計は鳴り続けている……。

「わふつ……」

突然、顔に変なものが当たった。モサッとかワサッとかいう感触。黄色い羽根が舞い散る。

羽根……？

「ピピッ！」

「こりどようやく田が覚めた。音をたてていたのは田覚まし時計ではなく、一羽の鳥だったのだ。

昨日、田覚まし時計をかけ忘れたんだな。

僕の田の前にいたのは、トサカのようく羽がピンと立つた、黄色い鳥だった。僕の顔に突進してきたソイツは、部屋中を嬉しそうに飛び回っている。

種類は何だらう。インコのようにも見えるが、大きさは僕の顔ほどもある。よく知らないけど、オウムとかの類いかもしれない。だいたいなんで僕の部屋に鳥が……？

「エンノイアー？ 起きてるんだつたら下りてきなさい」

「あ、はーい！」

ちょっと迷つたが、その鳥を肩にのせると、僕は一階へと下りた。

一階へ下りると、母さんは朝食の支度をしていた。階段を下りてきた僕に気づくと、振り返つて言つた。

「あら、その口、気に入った？」

「えっ！？ 気に入つた、つてことはまさか……」

まさか、母さんが僕に？

すると、母さんは満面の笑みで答えた。

「そ。ロバートがあんたについて。」

……僕は心底がっかりした。

だが、母さんはまだ嬉しそうに続ける。

「優しいよね～ 今度会つたらお礼言つのよ

ハア……。

とりあえず、自己紹介をしようと思つ。

僕はエンノイア・グノーヴァー。13歳。半年前に私立の中学校に入学したばかり。両親は離婚していて、今は母さんと一人暮らし。父親については……あんまり話したくないな。

ロバートっていうのは、母さんの今の彼氏。もう付き合つて三年ほどになる。母さんは今の通りロバートに熱をあげているようだけど……。僕はロバートのことがあまり好きじゃない。

「ところでエンノイア

「うん？」

今日の朝食はパンとコーンフレーク。バターを塗つたパンにかぶりつきながら、母さんの言葉を待つ。

「今日は早く帰つて来てね。大事な話があるから……」
妙に意味深な表情で言つ。

「う、うん……」

何だらう？

「へえ、いいなあ！」

「うん。『テニーク』って名前にしたんだ」

「ここは中学校の教室。

今話しているのは、ステイーブといって、クラスで一番仲のいい友達だ。

そうそう。あの鳥、飼うことにしてたんだ。名前は『テニーク』。

「それにしても、ロバートからもうたつたっていうのが気に入らないよ。あいつ、母さんにいいとこを見せたいだけなんだ」

すると、ステイーブが聞いた。

「ロバートのどこがそんなに嫌いなんだ？　俺、この前、お前んちに行つた時会つたけど、いい人そうだったじゃん」

「どうってわけじゃないけど……」

自分でもよくわからない。ただ、母さんとロバートが楽しそうに話しているのを見ると、なんだかイライラするんだ。

「ははーん。ヤキモチだな」

「ヤキモチ？　どうこうこと？」

「お前はそのロバート、に母ちゃんを取られるのが怖いんだろ。母ちゃんを一人占めしておきたいんだ」

「ば……！　違うよ……！　そんな、子供じゃあるまいし」

「ほら、席に着け。授業始めるぞ」

力チカチカチカチ。時計が9時10分を指している。呆然と時計を眺めながら、考える。

ヤキモチなんかじやないけどさ。……。

なんていうか、ロバートには男らしさがないんだよ。いつもへらへら笑つてゐるんだ。母さんもあいつのどこがいいんだか。……。

「……ノイア」

「？」

誰かに名前を呼ばれたような気がした。

あたりを見回してみたけど、先生は相変わらず教科書を読んでいるし、他の生徒が呼んだ気配もない。気のせいかな。

「……エンノイア」

今度は確かに呼ばれたような気がした。ふと、窓のほうを見ると

……。

「デユーク！！」

なんと、教卓の横にある窓の外に、デユークがとまっていた。窓ガラスをくちばしでたたき、侵入を試みている。

なんか、いやな予感。……。

パリン！！

デユークはくちばしで窓ガラスを割ると、またまた嬉しそうに、僕のほうに飛んできた。

「デユーク！ どうしてここに？」

デユークの代わりに、怒りに震えた先生の声が返ってきた。

「ハンノイアくん……。それは君のペットかね？」

見上げると……最悪なこと、デュークは先生の頭の上に大変な落とし物をしていた。

「あーあ！ しほられた、しほられた」

あの後、僕は2時間みっちりお説教を食らった。（僕が連れてきたわけじゃないんだけど）

デュークは何食わぬ顔で飛び回つてゐるし。

そうだ。今日は早く帰れって言われてたんだつけ。すっかり遅くなっちゃつたな。

僕は家の玄関のドアを開けた。すると……。

（ロバート……！？）

居間でロバートと母さんが話している。普段は化粧もしない母さんが、今は髪をたらして、妙にめかしこんでいる。

「なんだ。ロバートが来てたのか」

何だか無性に腹が立つてきて、僕はそのまま居間を素通りして、一階の自分の部屋に上がろうとした。しかし、

「ハンノイアー？ 帰つてるんだつたら、こっちへ来なさい！」

母さんに呼びとめられてしまつたので、僕は仕方なく居間へ向かうことにした。

「やあ、Hンノイアくん、久しぶりだね。おや？ その鳥は。よかつた、気に入ってくれたんだね！」

僕は、デコークを肩に乗せたまま居間に来たことを、ひどく後悔した。

「別に。じんなもの、もひつたつて、迷惑だよ」

「Hンノイア！…」

母さんがヒステリックに怒鳴りつかる。

「あはは。それもそうだね。悪かったね」

これだ。ロバートのこうこうこうが腹立つんだ。たまには怒つてみればいいのに。

「「ごめんなさい、ロバート。普段はこんな子じゃないんだけど……」

「で？ なんなのさ。大事な話つて」

イライラしてきたので、母さんの言葉をさあきつて聞いた。

「あ、それがね。私たち……結婚しようつと黙つて」

「え……？」

「結婚……つて……、結婚……？」

最後の方はほとんど声にならなかつた。

「どうしてこうして。あんただつて私たちが付き合つてること知つてゐるでしょ。」

「わうこうこうと黙つてるんじやないよー」

ロバートと母さんが、面食らつた表情でじつちを見てゐる。

「どうしてこんなやつと結婚するんだよー。母さんはいつもそうだ！ ちよつと優しくされたらすぐその気になつて。じつだつて、結婚したら父さんみたいに豹変するに決まつてる。じつが新しい父親だなんて、僕は認めないからねー」

無我夢中でそう言い終わつたとき……。

ピシヤツ。

頬に鈍い痛みが走る。

母さんが僕の頬を叩いたのだ。

「レナ！」

ロバートが慌てて母さんを制止する。

「あんたはどうしてそうわからず屋なの……！」 そりや、いきなり『この人が新しい父親です』なんて言つても、無理だと思つ。だけど、あんたは一度でもこの男性のことを理解しようとしたことがあるの！？ ロバートは一生懸命あんたと打ち解けようと頑張つてゐるに……」

「よさないか、レナ！」

ロバートが、母さんをなだめながら椅子に座らせる。

「ともかく、座つてゆっくり話そう。ほら、ヒンノイアくんもこいつにおりいで」

「……いだ」

「え？」

「母さんなんて大っつ嫌いだ――――！」

バタンッ！

「あ――ヒンノイア――！」

僕は、たまらず玄関から飛び出し、街の中を駆け出した。

……どうしてあいつなんだよ。

母さんが仕事で疲れてるときも、父さんが長く家に帰らないときも、支えてきたのは僕なのに。

街の人たちが驚いて、駆けている僕の方を見る。でも、気にもとめず走り続ける。

やっぱりヤキモチなかもしれない。でも、怖いんだ。母さんが僕よりロバートの方に行っちゃうのが、お願いだから、僕を一人にしないでよ。

涙がこぼれてきた。それをこまかすように、僕はひたすら走り続けた。

……十分ほど走つただろうか。ふと気づくと、僕は川原に立っていた。

川原の周りに立つた木々の葉が、寒そうに揺れてい。まだ、春とこには早すぎる3月。川からひんやりとした空気が流れてくる。日が暮れてきて、あたりは肌寒くなってきた。

……コートを着てくれれば良かつたな。

少し冷静になつて、あらためて考える。これからどうしよう。

今すぐ家に帰るわけにはいかないし……。

いや、帰るもんか。ずっとここにいて、心配せいやしない。
そう思つたとき……。

「……ハンノイア」

いつかも聞いた声が、僕の名前を呼んだ。

そうだ、この声、今朝教室で聞いたのと同じだ。

「誰ー？ デニから話してるのー？」

僕は宙に向かつて聞いた。

あたりには誰もいない。近くの木の枝に、デュークがとまっているだけだ。木々のざわめきが、一層激しくなる。

「我が名はアイオロス。……お前はあの男から母親を取り戻したいのだろう？」

「！」

「取り戻す」という言葉に、僕の心は動搖した。

それに、なぜ声の主はそんなことを知っているんだ？

「と、取り戻したいだなんて……。僕は別に……」「隠せどもよい。私にはお前のことがわかっているのだ。」

僕のことがわかっている？

一体誰だというのだろう。

すると、声の主がとんでもないことを言い出した。

「その願い、かなえてやる！」

「ほんとにー？」

「ただし、条件がある。アイオリア国の人、国王が持つ、『ブネウマの鏡』を翻つてほしい。そうすれば、願いをかなえてやる！」

アイオリア？ まだ世界地図はよく覚えてないけど、そんな国は聞いたことがない。

「アイオリアって……そんな国どこで……」

そう言いかけたとき、目の前が明るく輝いた。あまりの眩しさで、まわりが見えなくなる。木々のざわめきも、川の流れの音も消えていく……。

そのうちに、僕の意識は遠のいていった……。

ついで

第二話 森の狩人（前書き）

12/4 本文修正いたしました。本当は改稿したいところなので
すが、なかなか時間が取れないでの誤字脱字修正のみです。すみま
せん。
(^_-^)

第一話 森の狩人

> i 2 9 7 1 7 — 3 7 8 1 <

サワサワサワ……。

心地よい風が吹く。木々の葉がこすれる音がする。先ほどのように冷たい風ではない。どこか優しく、暖かい風だ。そつと田を開けてみる。徐々に視界が鮮明になり、そこが森であることが分かつた。青々とした緑が日の光を受けて輝いている……。

「森！？」

とっさに飛び起きる。頭や体の上に落ちていた葉っぱが、衝撃で舞い上がった。

「川原にいたのに……どうして森に……？」

僕の町の近くには確かに森があるが、今の季節はこんなに緑豊かではない。それに、どう考へても、自分の足で森まで歩いてきたとは思えない。

ガサツ。

ふいに、背後で物音がした。

「な、何……！？」

身をこわばらせて、次の反応を待つ。

フー……フー。

何者かの息遣いが聞こえる。おそらく、獣の。

おそるおそる後ろを振り返る。すると、一匹の獣が僕の目に映つた。

角は三本。顔の正面に一本、左右に一本ずつだ。体は獣らしく毛に覆われているが、その毛は淡い黄緑色をしていて、僕が今まで見たどの生き物とも一致しなかった。背丈はかなり大きい。四足歩行の状態で、僕の身長と同じくらいだろうか。

背に、亀のような甲羅を背負っている。甲羅に刻まれた六甲模様の隙間から、雑草が生えている。その姿が、なんとも滑稽で、愛らしいと言えなくもない。

しかし、今の僕に、愛らしいなんて言つて いる余裕はなかつた。
どんな危険な生物か、わからないからな。僕とそいつとの距離は今、
一メートルにも満たない。

とほしえ
見るからに懸鈎そでな艶た
東湯しなしよ
静かに
後ずさる。 そうして、そつと立ち上がった時……。
ザツザツ！

僕の動きの何が気に入らなかつたのか、そいつは前足で勢いをつけると、いきなり僕に向けて突進しだした！

すると、今度は頭上から木の杭がふつてきた！ それも何本も何本も。円を描いて落ちてくるので、僕はその円の中心に避難した。ふつってきた木の杭は、先がとがっているので、うまい具合に地面に突き刺さつていく。

ようやく、木の杭の落下がおさまった。幸い、この木の杭におびえて、獣は追跡をやめたようだ。グルル……と喉を鳴らしながら、

一息ついて、あたりを見回す。間近の木の枝に、果物の束のようなものがぶら下げる。自然に生えたものではない。果物の束を網でできた袋に入れて、誰かが木の枝にぶら下げるようだ。

そうか、罠だつたんだな。よく見れば、木の杭のあいだにあいだに網がはられている。

あの獣が、ここにある果物を求めて走る。すると、地面に張られたロープに足を引っ掛ける。頭上から、網をはつた木の杭がふってきて、獣を取り囮む。と、まあ、そういうことだろ？ それにしても、誰がこんな仕掛けを作つたんだろう。

「伏せろ！！」

ふいに、頭上から声が聞こえてきた。えつ！？ 伏せろつて……！？

「ガアアアアアア！！」

なんと、遠くにいると思っていたあの獣が、すぐ目の前まで迫っていた。牙の生えた口を大きく開いて、今にも僕に飛びかかるうとしている！ いや、僕に飛びかかるうとしているのではなく、後ろの果物を狙っているのか？ どちらにしても、危険な状況であることに変わりはなかつた。

「伏せろつて言つてるだろ！」

そ、そつか。伏せるのか……。

僕があわてて頭を下げる、僕の頭のてっぺんの毛をかすめて、何かがものすごい勢いで飛んできた。

それは獣に向けてまつすぐ飛んで行き、獣の額に命中した。矢だ！ 誰かが木の上から矢を放つたらしい。

さらに一本の矢が放たれる。一本は獣の首に、一本は脇腹に命中した。

獣は悲鳴を上げながら、しばらく暴れていたが、やがて横に倒れると、動かなくなつた。

おそるおそる木の上を見上げてみると、そこにいたのは、大きな弓をもつた……少年だった。太い木の幹に腰かけて、不機嫌そうにこちらを見ている。年は僕よりも少し上のようだ。16～17歳と

いつたところだろう。黒いベストの上に、皮の上着を着て、ブーツを履いている。その手に持った弓だけでなく、腰のベルトには短剣、ブーツには小ぶりのナイフをさしている。しかし、僕を驚かせたのはその弓の腕前でも、その妙に古風な装備でもなかった。

肩までたらされた髪が、真っ白なのだ。シルバーブロンドとでもいうのだろうか。ほとんど色のないその髪は、あたりの葉の色を反射して、淡く緑色に輝いている。さらに、角度によつて銀色、紫色……と微妙に表情を変えている。

僕が少年の方をぼううと見ていると、彼が口を開いた。

「あーあ、罠を台無しにしやがつて。生け捕りにし損ねたじゃねーか」

その美しい容姿とは裏腹に、ぞんざいな口調。

ともあれ、彼が不機嫌そうにしている理由が分かった。この罠は、彼が仕掛けたものだつたのだ。さつきの変な獣を捕まえるために。それが、僕のせいに失敗してしまつたのだろう。

だけど、僕だって必死だつたんだからな。

「あの……助けてくれてありがとう。それで、ここは一体……」
僕が話し終える前に、少年が木の上から下りてきた。そして、僕の前に歩み寄ると……網ごしに、僕の顔をじいつと見つめ始めた。手をあごに当て、何かを考え込んでいる様子だ。

「な、何ですか？」
「……かわいいいな」

僕は、混乱した。

か、かわいいつて……。確かに、クラスの女の子に「エンノイアくんつて、かわいいいー！」とか、言われたことあるけどさ。そういうことは、男には言われたくないっていうか……。

僕が一人でざまざましているのにはかまわず、彼は続けた。

「羽がきれいだよなー」

ん？ 羽？

僕に羽なんかあつたか？

「ひやつ！」

そのとき、背中に妙な衝撃があつた。目の前に黄色い羽根が舞つた。

そうだ、黄色い羽根といえば……！

「デューク！！」

なんと、そこにいたのはデュークだった。いつの間にか、近くにいたらしい。

毎度のことながら、神出鬼没だな。こいつ……。

でも、よかつた。ここがどこだかわからないけど、一人じゃないつてだけで、ずいぶんましだ。

「それで、ここは一体どこなの？」

僕は、目の前の少年に問い合わせた。ちなみに、僕はさつき、ハマつていた罠から出してもらつていた。

「何だ、お前よそ者か？ ここはパーンの森。アイオリア島の最南端だ」

「アイオリア！？」

僕は、耳を疑つた。

アイオリアって。そう、確かに、あの天の声が言つていた言葉。母さんをロバートから取り戻す代わりに、僕に課せられた条件。

「アイオリア国」の「ブネウマの鏡」を壊せ、と……。僕はその、聞いたことのない国、アイオリアに来てしまつたというのか？

僕が一人考えていると、弓の少年は、ブーツにさしていったナイフを取り出し、さつき彼が倒した獣の皮を剥ぎ始めた。

「な、何をしてるの？」

突然の行動にぎょっとした僕は、聞いてみた。

「皮を剥いでるんだよ。皮は都で売れるからな。生け捕りなら、家畜として高く売れるんだが」

「へえ……」

この国の人たちは、こんな動物を家畜にするのか……。
それはともかく、僕は再び考えた。あの、天の声。アイオロスとか言つてたつて。あいつが、言つていたことだ。

「アイオリア国の、国王が持つ、『ブネウマの鏡』を割つてほしい……。

国王つて都にいるものじゃないのかな。

「よし、決めた！」

なんだ？ という感じで少年が振り返る。

「この人に、都まで連れて行つてもらおう……。」

ドテツ。

少年がわざとらしくよろけてみせる。意外にノリのいい人だな。
「なんだそりや！ 勝手に決めんな！ だいたいなんで俺がお前を

都に連れてつてやらなきやいけないんだ！」

彼がもつともなことを言つた。でも、僕は引き下がらないぞ。
「お願い！！ 僕は、どうしても都に行かなきやならないんだ。でも僕は道もわからないし、さつきのやつみみたいな化け物も倒せないし……」

「だめだな

少年は、あっさりと否定した。

「都に行くためならなんでもするよ、仕事も手伝うよ！？」

なおも食い下がるが、

「そういう問題じゃねーよ。俺は今すぐ都に行く気はねーし。だいいち……」

少年が僕の襟首をつかんだ。

「……俺は人間つてのが大嫌いなんだ。とつとと失せろ。俺がお前に優しくしてられるうちにな！」

ドサツ。軽く突き飛ばされた。

「じゃあな。モンスターと魔物に気をつける」

そう言つて、少年は立ち去つてしまつた。一人取り残されて、デ

ユークと顔を見合わせる。（こいつ、人間みたいな動きをするんだ）
いけそうだったのに。口は悪いけど、なんだかんだでいい人だつ
たし。それに対し、人間が嫌いって……じゃあなんで僕を助けてくれたん
だろう？

まあ、考えても仕方ないか……。僕は、とりあえず歩き出すこと
にした。

「こいつが、最南端って言つてたな。北に歩けば森の外に出られるだ
ろうか？ 今は夕方みたいだから、太陽が沈みかけている方角が西。
ということは、太陽に向かって右向きに進めばいいのか。

僕は、とりあえずそう考へることにして、この見知らぬ大地を歩
き始めた……。

第一話 森の狩人（後書き）

よかつたら感想等、聞かせてください

第二話 暗闇の中で

何時間歩いただろう。すっかり日が暮れて、太陽も見えなくなつた。

しかし、一向に森から出られる気配がない。

方向が間違つていたんだろうか。それか、ものすごく広い森で、歩いて出るには何日もかかるかもしれない。

もう、限界だ。喉はからからだし、お腹も空いた。

とうとう僕は、一本の大きな木の根元に、座り込んでしまつた。

「ピペッ」

デューグが、心配そうに僕の顔を覗き込む。

「デューグ……。お前、飛べるんだから、どうなつてるのか見てきてよ」

通じるわけないと思いつつ、つぶやいただけだったが、意外にもデューグは「わかった!」と言わんばかりに一声鳴くと、空高く飛んで行つた。

しばらくして、デューグが戻ってきた。ひどくあわてている様子だ。

「ピペッ！ ピイ！ ピペッ！」

「な、何？ なんて言つてるの?」

羽をばたつかせて、しきりに何かを訴えているが、僕にはさっぱりわからない。

僕が鳥の言葉でも話せればいいんだけど……。

「あ！ デューグ！ ！」

しひれをきらしたのか、デュークはどこかへ飛び去ってしまった。

「デュークがなかなか戻ってこない。

……もう、僕のことを見捨ててしまつたんだろうか。

そりや、そうだよな。まだ、飼い始めてから一日しか経つてないんだし。さほど、なついてるつてわけでもなかつた……かもしけない。

だけど、デュークまでいなくなつてしまつと、僕は本当に独りぼつちだ。

真つ暗な森の向こうから、不気味な獣の鳴き声や、うなり声のようなものが聞こえる。

……ふいに、暗闇に恐怖を感じて、身震いした。

あの少年が言つてたつて。「モンスターと魔物に気をつけ」って。

あの三本の角の怪物が「モンスター」なのかな。

じゃあ、「魔物」……つて何だらう。

たくさん恐ろしいイメージが、頭をよぎる。

（そんなもの、いるわけない……）

僕はあわてて頭からそれらのイメージを振り払つと、暗闇から、明るい月の方へと視線をうつした。

母さん、心配してるかな……。

煌々と輝く月を眺めながら、ふと、母さんのことを考える。

いつもなら今頃、学校であつたことを話しながら、母さんの手料理を食べているのに。

……ちやんと、話しかねばよかつた。母さんと、ロバートと。

僕……、何やってるんだろ？

何だか、悲しくなってきた。すうぐ……みじめな気分だ。

僕が落ち込んでいると、背後から鳥の羽音が聞こえた。
デューコークだ！ きっとデューコークが戻つてくれたんだ！

僕のことを見捨てたわけじゃなかつたんだ！

「デューコーク！」

嬉しくなつて、振り返る。

しかし、僕の目に入つたのは、デューコークではなかつた。
背後の森に、無数の目、目、目。小さく鋭い一いつの光のセットが、
森の中の暗闇から、大量にのぞいていたのだ。

羽音がいつそう音量を増して、不吉に響いてくる。

「ひつ……！」

僕は恐ろしくなつて、その場を立ち去るひつと、駆け出した。
と、その時……！

「うわあ……！」

黒い塊が、僕に向かつて大量に飛んできた。羽音の正体は、無数
のコウモリだったのだ。

無数のコウモリたちが、僕にまとわりつき、噛みついてくる。

一つ一つの痛みは大したことないが、こう集団でこられるとなつた

まったくもんじやない。

耐えきれず、地面に倒れ込む。体を左右に転がし、コウモリをは
がそうと頑張るが、コウモリたちは、攻撃を緩めることもなく、ま
とわりつき続ける。

顔の周りにまでコウモリがはりつき、息ができなくなる。
絶え間ない攻撃と、息苦しさに、意識がもつれはじめてきた……。

僕、死んじやうのかな。

「こんな、わけのわからない場所で？　母さんと仲直りもできないまま？」

そんなの、嫌だッ……！」

必死に叫んだが、声にならなかつた。

ヒュッシュ。

突然、一、二、三個の石ころが飛んできた。すると、「ウモリたちが一斉に僕から離れていく。

どうやら、飛んできた石を追いかけて行つたようだ。

一体、どうなつてゐるんだ？

不思議に思いながら、傷だらけになつてしまつた体を起こすと……。

「まつたく。見てらんないな。『ブテラス』とくに死にそつな顔いやがつて」

そこにいたのは……信じられないことに、最初に会つた少年だつた。しかもその肩には、『デューク』がつてゐる！

「ブテラスは動くものを追う性質があるからな。出合つたら、あんまり動かない方がいいぞ」

話の内容から、さつきの「ウモリ」のことを「ブテラス」と言つてゐるのだとわかつた。

いや、そんなことはどうでもいい。

「どうして、ここに？　それに、『デューク』も……」

少年は、こともなげに答える。

「さつき、こいつと会つたんだよ。聞けば、お前が道に迷つてゐて言つからさ」

僕は啞然とした。どうして、この少年は、そんなことがわかるのだろう？

僕には、『デューク』が何を言つてゐるのか、サッパリだつたのに。

少年の肩にとまっていたデュークが、嬉しそうに、僕の肩に飛び移つた。心なしか、得意そうな表情をしている。

と、ここで、僕はあることに気がついた。

「じゃあ、僕が道に迷つて聞いて、わざわざ助けに来たの？
人間嫌いなのに？」

少年の方を見る。

自分でも、その発言と行動の矛盾に、気がつかなかつたらしい。
彼の顔がみるみる赤くなつてきた。

「べ、別に、助けに来たわけじゃねーよ。俺は、こっちに、用事が
あつて……」

嘘だな。

顔を真つ赤にしながら、彼は何やら言い訳を続けている。
その様子が無性におかしくて、僕は吹き出してしまつた。

「な、なんだよ！ 何がおかしいんだよ！」

彼が怒りだしたのがまたおかしくて、一層激しく笑い続ける。ヒ
ーヒー、涙を流しながら、笑い転げる。
緊張の糸が解けて、僕は……笑いが止まらなかつた。

夜の暗闇の中に……僕の笑い声が、ひときわ大きく響いた。

つづく

田の前に、スープと一切れのパンが置かれている。そのスープの皿を両手で持つと、じんわりと温かさが伝わってきた。

小さく刻まれたキノコが浮いただけの、實に質素なものだが、それでも今の僕にはご馳走に違ひなかつた。

目の前には焚き火が燃えていて、火の爆ぜる音がなんとも心地いい。

僕は、夏休みのキャンプで焚いた、キャンプファイアのことを思い出していた。

もつとも、あの時のキャンプファイアはもつとずっとにぎやかだったけれど。

今は、肩の上でうつらうつらしているデコークを除けば、隣に少年がひとり座つてゐるだけだ。

まだ幼さの残るその横顔は、彫刻のようだに美しく、軽やかで、非現実的にさえ感じられた。

少年の長いまつ毛が頬に深い影を落とし、両肩に落ちたシルバーブロンドの髪は、焚き火のゆらめきを映し出していた。

彼の名はシーア・ヨークリッド。職業は、ハンターといったところかな。

各地の森を転々としては動物を狩り、その動物から得た骨や皮を街で売りながら暮らしていいるらしい。

まだ高校生くらいの年齢だといつのこと、なぜそんな暮らしがしてゐるのか。気になつたが、そこまでは聞くことができなかつた。（もしかしたらこの国では普通のことなのかも知れないけど……）

え？ なぜ僕が彼と一緒にいて、しかもご飯を食べているかつて？

話は、僕が「ウモリに襲われているのを、シーアに助けてもらつたところまでさかのぼるんだけど。

助けてもらつた後、シーアが、照れ隠しに言い訳していたのがおかしかったのと、緊張が一気にゆるんだのもあって、僕は笑いが止まらなかつた。

『何がおかしいんだよ！』とか、『笑うのをやめないと怒るぞ！』とか、何やらわめいていたシーアだつたが、突然、笑つている僕に、綱でできた力ゴをかぶせてきた。

「わつ！ いきなり何するんだよ！』

「薪集めてこい！

はあ？ 薪？

全くわけがわからない。すると、シーアが言つた。

「仕事、手伝うつて言つたろ？

確かに言つたけど……。それは、都に連れていくてもう一つ交換条件として言つたんだ。

あ、あれ？ てことは……。

見れば、シーアはなんとも照れ臭そうにしている。

「一緒に行つていいの！？

「まあ、この際しようがないだろ

何がしようがないのかよくわからないうが、とにかく連れていくつてもらえることになつたようだ！

「さつさと薪集めてこいよ！』

そんなわけで、僕は彼と都に行くことになつたのだった。

そうそう、なんとこのスープ、彼が作つてくれたのだ。

シーアは荷物の袋からいそいそと鍋を取り出すと、僕が集めてきた薪を使って、焚き火を起こし、あつという間にスープを作つてしまつた。

これが、すくすくおいしいんだ。きっと、いつも森で生活してるか

「うう」と慣れてるんだうな。

彼はさつきから、いつもの方を見向きもせずにスープを飲んでいるけど。

「パパシ」

僕の肩の上で眠りかけていたデュークが目を覚まし、シーアの方へ飛んで行った。

「お、お前も食うか？」

シーアは、デュークに気づくと、手元のパンを細かくちぎり、デュークに食べさせ始めた。

満面の笑みを浮かべて、すくなく楽しそうな様子だ。

彼が笑うのを、僕は初めて見た気がする。

そういえば、デュークのことを「かわいい」って言つてたな。

「動物が好きなんだね！」

僕が言つと、シーアは僕がその場にいることを忘れていたかのように驚いた。

「ま、まあな

ちょっと気まずそうにした後、

「動物は裏切らないからな……」

聞こえるか、聞こえないかくらいの声で、つぶやいた。

動物は裏切らない？

なんかよくわからないけど、意味深な言葉だな……。

「さて、明日も歩くし、そろそろ寝るか

シーアは、先ほどの荷物から、薄い布を一枚取り出すと、それを地べたに布団のようについた。促されるまま、その中に潜り込む。

「あれ、シーアは寝ないの？」

てっきり、もう一組布を出すのかと思つたら、シーアは木にもたれて座つたままだ。

「ん？ ああ。俺は火の見張りだから

そうか。ここにはあの変な怪物とかがいるもんな。火を絶やしちゃいけないんだ。

っていうか、それをシーア一人に任せていいんだろうか…？ 僕も交代で見張った方がいいんじゃないか？

「当たり前だ。一時間したら起こすからな。わいせと寝ろ」

なんだ、シーアは初めからそのつもりらしい。

しかし、僕はなかなか眠ることができなかつた。寝ている地面が固すぎるせいもあるが、いろんな考えが絶え間なく頭をよぎつて、落ち着かなかつたからだ。

母さんは、どうしているだろう。結局、夜も帰らなかつたことになる。きっと、心配しているだろうな……。

そうだ、今日は見たい番組があつたんだつけ。母さん録画してくれているかな。

明日の学校はどうなるんだろう。無断で休んだら怒られないのでかな？

眠れないな……。

ふとシーアの方を見ると、彼は木にもたれかかつたまま、顔を伏せていた。

僕が声をかけると、すぐに伏せていた顔を起こす。眠っていたわけではないらしい。

どうにも考えがまとまらないので、彼に話しかけてみることにした。

「シーア、ブネウマの鏡……って知ってる？」

意外にも、すぐに返答がきた。

「ああ、聞いたことがあるな。確か魔界と通じてるっていって……

「ま、魔界！？ 魔界なんてものが本当にあるの…？」

僕は、驚いた。思わず布団からはね起きる。

モンスターに、魔物に、魔界だつて？ 非現実的にもほどがある。

「さあな。でも、魔物は魔界から来るらしいぜ」

「その、モンスターとか、魔物とかつて何なの？」

「さつきから気になつて、いたことを聞いてみた。

「そんなことも知らねーのか？」

「だつてしようがないじゃん。僕の国にはそんなものいないんだから。

シアアは、ため息混じりに、説明を始めた。

「いいか。モンスターつていうのは、長い間、月の光を浴び続けた動植物が変化したものだ。俺がさつき捕まえようとしていた、三本角のアイツなんかがそうだ。多少凶暴だが、奴らのテリトリーを侵さない限り、普通襲われることはない」

「へえ……。でもアイツ、元は何の動物だつたんだ？ あんな動物見たことないぞ。

「アイツは、雑草か何かだろ。最もありふれたモンスターだとも言えるな。トリップスつて呼ばれてる」

「そういえば、甲羅のよつた背中に雑草が生えてたつけ。しかし、随分とアクティブな雑草だ。

「対して、魔物つてえのは、魔界から来る、と言われている生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともある。大抵は夜にしか出ないな」

なんだか、ものすごい話になつてきただな……。

森の中を闊歩するモンスター。魔界と呼ばれる場所から来るといふ魔物たち。そして、その魔界と繋がっているといふ、プネウマの鏡……。この国は、僕の住んでいる世界とは随分と異なるようだ。眠れるわけないとつていたが、さすがに精神的な疲れもあってか、シアアが話を終える頃には眠りに落ちていた。

もつとも、一時間後にはきつちり叩き起されたけど。

見張りを交代し、一時間後ほど経つたところで、再びシアアを起

「じ、眠りについた。

「私たち一人きりで暮らす」としたの。エンノイア、あんたが邪魔なのよ

母さんが、ロバートとどこかへ行つてしまつ。

嫌だ！ 僕を置いていかないで！

「母さん！」

叫びながら、母さんの背中を必死でつかむ。

「母さん！ 行かないで！」

やつた！ つかまえた……！

「誰が母さんだ」

つかまえたのは、母さんではなかつた。
寝ぼけ眼をこすりながら、よく見ると、それはあきれ顔をしたシーアだつた。僕は間違つて、シーアの上着をつかんでいたらしい。なーんだ。夢か。てつくり母さんが、僕をおいてロバートとどこかへ行つちゃうのかと思つた。

「それで、あとどのくらいかかりそうなの？」

昨日の残りのスープを食べた後、僕たちは早々に出発した。

「そうだな。あと二日つてとこかな……」

「二日あー？ もうちょっと早く行けないの？」

三日も留守にするなんて。喧嘩して飛び出してきたとはいえ、いくらなんでも母さんが心配するよ。下手すると捜索願いなんか出されちゃうかもしない！

「無茶いうなよ。馬でも一日かかる距離なんだから

馬を基準に言われてもよくわからないけど……。

ガサツ。

だしぬけに、森の中から物音がした。僕とシーアに、明らかに緊張が走る。

ガサツガサツガサツガサツ。

ついてきてるな……。姿は見えないが、木から木へ、飛び移つている気配がする。

トリップスではなさそうだ。もつと身軽なやつだ。

一瞬昨晚のコウモリたちが頭に浮かぶが、少なくともあるような大群ではないだろう。

「シーア……」

「しつ。黙つてろ」

見れば、シーアはとっくに口を構えている。

ガサツ！

ソイツが僕らの横を通りすぎた時、シーアが矢を放つた。放たれた矢はまっすぐ飛んでいき、木々の中に吸い込まれていったかと思うと、何か黒い物体を伴つて落ちてきた。

シーアと共に、その物体に駆け寄る。

よく見ると、それは小さなドラゴンだつた。

いや、実際のところ、ドラゴンなんて見たことがないけど。それは、物語なんかでよく見るドラゴンにそっくりだつた。

ただし、すごく小さい。それから、足と翼は持つているが、手はないようだつた。

「コイツは魔物だな……」

そのドラゴン？ を見て、シーアが呟く。

そうか、魔物……。

魔物とは、魔界から来る、と言われている生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともあるという。

それにしておかしい。確かシーアは魔物は夜にしか出ないと言

つていたはずだけど……。

「そなんだ。近頃明るいうちから魔物が出ることがある。これは何か、この国でおかしなことが起っていのかもしれないな……」

僕らはそれから、日が暮れるまで歩き続けた。

辺りが夕闇に包まれた頃、僕らの目の前に一つの村が現れた。

「村だ！」

僕は歓喜した。疲れ果てて、もう一歩も動けそうになかったからだ。

今日は晴れていたといつに、僕もシアーアも雨に降られたよつて汗でびっしょりだ。

相変わらず元気なのは、鳥の『テューコクくらい』。ちえ、飛べるやつはいいよな。

ともかくこれでゆっくつ休める……。

「さあて、ここいら辺でひと休みするか！」

そう言いながらシアーアが荷物を置いた『ここいら辺』とは、まだ村に入りきらない森の地面の上だった。

そして、昨日と同じように、焚き火を組み立て始めてしまった。

「む、村に入らないの！？」

僕が慌てて聞くと、シアーアはさも当たり前のよう答えた。

「言つたろ。俺は人間が嫌いだつて

「で、でも……！」

足が棒になつたように疲れていても、滝のように汗をかいていても、村の宿で休むことを拒否するほど人間嫌いだなんて。

「それに、宿に泊まる金なんかねーし
た、確かに……。

僕は家に財布を置いたままだし、向こうのお金がこの国で通用するとも思えない。民家に泊めてもりえるよう交渉することもできたかもしけないが、もう僕にそんなことをする体力は残つていなかつ

た。

「じゃあ、僕も野宿する……」

僕は、心底がっかりしながら、了解した。

シアはそんな僕の様子なんか気にも留めず、早速晩御飯の支度をしていた。

つづく

「……ノイア」

誰かが遠くで呼んでいる気がする。

「……ノイア」

まだだ。

うつすら目を開ける。まだ夜中のようだ。

眠いんだよ。邪魔しないでよ。

ほんの少し身動きして、再び深い眠りに落ちようとしたとしたら……。

「エンノイア！」

僕は飛び起きた。

瞬時にあたりを見回して、自分の置かれた状況を理解する。

そうだ！ 今は僕が火の見張りをしていたんだった！ 寝ている場合じゃない！

よかつた……。火は消えてない。

煌々と灯った焚き火の炎を見ながら、ほっと肩をなでおろす。やれやれ、今日は一日中歩いたからな。

昨日はシーアが先に見張りをしたので、今日は僕が先に見張りをすることになったのだが、なにしろ疲れた。

数分と経たないうちに僕は眠りこけてしまっていたのだ。

この国には、『モンスター』と呼ばれる、動植物が変化し、凶暴化した生き物たちと、『魔物』と呼ばれる、魔界から来る生き物たちがいる。

森の中だから、普通の野生の動物なんかもいるだろう。

そういう者たちに襲われないようにするため、火を焚き、夜通し見張りをしなければならないのだ。

僕は、昨日襲われた、コウモリのような姿をしたモンスター『プレラス』というらしいのことを思い出して、身震いした。もう一度とあんなのには関わりたくない。しつかり見張らなきやな。

両頬を軽くたたいて、自分自身を戒めた後、ふと、焚き火の反対側で眠るシアーケーを見た。

焚き火に照らされる、シルバーブロンドの髪。肩まで届く長い髪を、束ねることもなく、無造作に投げ出している。

こちらからは顔は見えないが、スースーと寝息が聞こえる。

……彼について、気付いたことがある。

昨日の夜も同じように火の見張りをした。

一時間ずつ交代で、片方は見張りをし、その間片方は眠る。

……しかし彼は、僕と見張りを交代した後も、ときどき起きては僕の様子をうかがっていたのだ。

最初は、眠れないのかな、とか、僕が居眠りをしないか心配なんか、とか、思つた。

でも、次第に、僕を警戒してるっていうのかな……、僕があやしい動きをしないか、目を光らせていることがわかつた。まるで、人間におびえる獣のように。

寝る時も決して短剣を手放さない。

普段は、ちよっぴり素直じゃないけど、優しくて、意外とノリが良くて、普通の少年に見える。

けれど、森の中に隠れ住み、他人の前で眠ることを警戒し、村に入ることを拒む。

そういうことが、シーアがこれまでたどってきた人生を物語つているような気がした。

しかし、さすがに疲れたんだろう。今日はばべつすり眠っているよう見える。

起きていた気配も、起きだす気配もなさそうだった。

ん？ ちょっと待て。

じゃあ誰が僕の名前を呼んで、僕を起こしたんだ？

「ピピッ！」

僕が考えていると、どこにいたのか、デューコークがひどくあわてた様子で飛んできた。

デューコークがあわてているのを見るのは、これで二度目だ。

一度目は、僕が森で道に迷っていた時。

なんどデューコークは、一度は離れたシーアを、呼びに行つてくれたのだ。

どういうわけか、シーアにはデューコークの言いたいことがわかるようで、僕が道に迷ったことを悟り、助けに来てくれた。

僕には、デューコークの言っていることはわからない。

でも、今回はそんな心配をする必要はなかった。

なぜなら、すぐにデューコークがあわてている理由がわかつたからだ。

「げえッ！？」

ものすごい突風が顔に吹きつける。

とても口を開けていられない。

あんなに頑張って見張っていた火も、あえなく消えてしまった。

間もなく、突風を起こした原因のものが現れた。

ドラゴンだ！ とてつもなく大きなドラゴンだ！

緑色の大きな翼で、森の上空を優雅に飛んでいく。

足に、鋭い爪があるのがわかる。

よく見れば、そのドラゴンには手がなく、朝に見た小さなドラゴンに似ていた。

もちろん、大きさは全然違う。

片方の翼だけでも、僕の身長くらいはありそうだ。

「シーア！ 起きて！」

あわててシーアをたたき起こす。

しかし起こすまでもなくシーアはとっくに起きていた。

あまりの風に立ち上がれないでいるようだ。

「魔物だ！ ワイバーンだ！」

シーアが叫ぶ。

そのワイバーンと呼ばれたドラゴンは巨大な翼をはためかせながら、僕たちの頭上を飛び去つて行つた。

飛び去つた後もしばらく風は収まらず、あたりの木々の葉を巻きあげていつた。

「逃げるぞ！」

呆然と突つ立つていた僕の腕をつかみ、シーアが急かす。

僕たちは取るもの取りあえず、息も絶え絶えに、森の中を走つた。村から百メートルほど離れたところで、振り返り、様子を見ることにした。

そう、ドラゴンが飛び去つたのは、村の方向なのだ！

そして、僕は信じられない光景を目の当たりにした。

村の上空を飛んでいたドラゴンが、大きく息を吸うと、口から巨大な炎を吐いたのだ。

先ほどまで暗闇だった森の中は、明るく照らしだされ、ここまで

熱気が伝わってきた。

熱氣にあおられて、森のざわめきが激しくなる。

一瞬にして、村は炎に包まれた。

人の気配すらほとんどしなかつた静かな村が、一転して悲鳴と轟音に包まれた。

燃え上がる家々から、次々と村人たちが飛び出してくる。

赤ん坊を抱えた女、親とはぐれたのであらう子供たち、炎に囲まれて行き場のなくなつた老人……。

懸命に家を消火しようとする者もいたが、とても意味のあることとは思えなかつた。

村が、文字通り地獄のように変わつてしまつたのだ。

すると突然、村の上空を飛んでいたドラゴンが下降し始めた。

「あ！ シーア！ 女の子が！」

村の中央広場に降り立つたドラゴンは、炎から逃れようと広場を逃げ回つていた少女の肩をその鋭い爪でつかむと、少女をつかんだまま再び上昇し始めてしまつた！

「さらうつもりなんだ。大変！ 助けなきやー！」

僕はシーアの方を振り返り、そう言つたが、

「いや……助けても無駄だ、行こう」

なんとシーアはそう言つと、村とは反対方向に歩き出やうとしていた。

「無駄……だつて？」

僕は耳を疑つた。

見捨てるつていうのか！？

目の前で村が襲われているのに！？ 女の子がさらわれようとしているのに！？

……シーアはいいやつだと思ってた。

素直じゃなくても、人間嫌いでも。

なんだかんだで僕を助けてくれた。
それなのに……。

「そんなの納得できない！！」

僕は思わず叫んでいた。

シアアが驚いて僕の方を見る。

「弓を貸して！ 僕が助ける！」

僕はシアアが背負っている大きな弓を、すかさず奪い取ると、ドラゴンに向かつて構えた。

弓の弦が思つた以上にかたい。歯を食いしばりながら弓くのがやつとだ。

「お、お前、弓が使えるのか！？」

シアアが背後で叫ぶ。

「やつたことないけど……」

弓を一層強く引く。弦が指に食い込んで痛い。

「やるしか……ないだろ……――――」

叫ぶと同時に、僕は矢を放つた。

つづく

ヒュンッー！

矢は、放物線を描きながら、勢いよく飛んで行った。

……ドラゴンとは全然違う方向に。

当然ながら、ドラゴンは全くひるむことなく、少女をつかんだま
まだ。

「あれ？」

「お前……下手だな」

シーアがあきれた声で言つた。

「貸せ。『』つていうのは『』つやつて射るんだ」

シーアは、僕から『』をむしり取ると、その纖細な外見からは想像
できないほど、軽々と『』を引いた。

そして、矢は正確にドラゴンの足を貫いた。

ギャオオオウ！！

ドラゴンは悲鳴を上げ、しばらく暴れていたが、やがて少女を解
放した。

「あ！ 落ちるよー！」

少し高いところまで浮上していたので、放された少女は森の中に
落下してしまつたのだ。

「下は森だから大丈夫だろ。それより……来るぞー！」

シーアが言うよりも早く、怒りに狂つたドラゴンが、こちらに向
かつて突進してきた！

ものすごい風圧で、何が何だか分からなくなる。

ドラゴンの鋭い爪が、田の前に迫つてきた。

身がすくんで、動くことができない。田を固く閉じ、身をかがめ、

ドラゴンが過ぎ去るのを待つ。

一瞬、何かが覆いかぶさつてくるような感触がした。

ビュウウウウウ。

よつやく、風がおさまつ、おれるおれる田を開ける。

?

特に、何事もなかつたよつだ。ドラゴンにさらわれたわけでも、怪我をしたわけでもない。

だが、シアアはそうではなかつた。

苦しそうに息をつきながら、しゃがんでいる。

「くつ……」

「シアア！」

なんと、シアアはあのドラゴンの鋭い爪で、肩を引っ掻かれていたのだ！

大怪我といつほどではないが、服が裂け、血が出ている。破れた服の隙間から、肌に痛々しい数本の筋が見える。肩に触れようとすると、うるせううに払いのけられた。

「いいからお前はあの女を助けに行け！」

「シアアはどうするの！？」

まさか、こんなところに置いては行けない。

「俺は、あいつを倒す……！」

ハア、ハア、ハア。

草木をかきわけながら、必死で少女を探す。

村からは少し離れたところに落ちたよつだ。

ドラゴンは、再び村の広場のあたりを旋回していた。

下の方から、数本の矢が飛んでくる。

その何本かはドラゴンに刺さり、何本かはつまくかわされた。

（シアアが戦つてゐるんだな）

村の様子を確認してから、再び少女を探し始めた。

と、その時、草と草との間に、赤いスカートとそこから出た茶色のブーツの足が見えた。

あの女の子が履いていたものだ！

急いで草をかき分ける。

すると、落ち葉にまぎれて、一人の少女が倒れていた。思つた通り、さつきドラゴンにつかまつっていた少女だ。歳は、僕と同じくらいだろうか？ 金色の長い髪に、カチューシャをしている。

氣を失つてはいるが、幸い、目立つた怪我はないようだ。どうやって運ぼうか考えあぐねていたら、彼女が目を覚ました。

「あ……あなたが助けてくださったんですか？」

ありやりや。まいっただ。

そうとも言えるし、そうでないとも……。

とりあえず、僕はちやっかり手柄を自分のものにしておいた。

彼女に肩を貸し、歩きながら、僕はあることについて考えていた。さつき、ドラゴンに襲われた時。

一瞬何かが覆いかぶさつてきたような気がした。

あれは、シーアが僕をかばつてくれたのだ……。

だから、僕は怪我をせずにすみ、彼は肩を引っ搔かれてしまった。人間嫌いと言いながら、僕をかばつてくれる。少女を見捨てると言いながら、今こうして村のために戦つている。

僕にはシーアがよくわからないよ……。

木の下に身を隠しながら、少女と共に村の入口まで行くと、シーアは相変わらずドラゴンに矢を放つていた。

しかし、残念なことに、ドラゴンの巨大な胴体には、シーアのちっぽけな矢などかすり傷でしかないようだ。何本矢が刺さるうが、全く動じていない。

ドラゴンが再び大きく息を吸い始めた。
炎を吐く気だ！

「あーんママー！」

間の悪いことに、親とはぐれてしまった小さな子供が、広場に出てきてしまった。

ドラゴンがそちらを振り向く。

「危ね……！」

シーアがとつとつに子供をかばつた。

ちょうどその時、ドラゴンが炎を吐いた！

「うわああああ！－！」

「シーア！－！」

背中に炎をくらつてしまつた。
がつくつとうなだれるシーア。

「村に他に戦える人はいないの－？」
さつき助けた少女に尋ねる。

「若い男は皆出稼ぎに行つているんです……村に残つてているのは女子供と老人ばかりで」

本当に申し訳なさそうに、少女が答えた。
そんな……。じゃあどうしたら……。

突然、僕の脇からデュークが飛び出した。

そのまま真っ直ぐドラゴンへと向かつて行く。

そして、ドラゴンの顔を嘴でつつき始めた。

「デューク！ 何をする気だ！」

案の定デュークはあつたつとドラゴンの翼に払いのけられてしまつた。

しかし、それでもめげずにまとわりつき続ける。

とうとうしびれを切らしたドラゴンが、デュークに向かつて軽く火を吐いた。

軽くといつても、デュークにとっては全身が包まれるほど炎だ。真っ黒になつたデュークが、広場に墜落してきた。

僕はあわててデュークを助けに行つた。

見るも無残な黒い塊が、煙を出しながら、広場に落ちている。嫌だ嫌だ！ デュークが死んじゃうなんて！

泣きそうになるのをこらえながら、そつとデュークを拾いあげると、少々羽が焦げてはいるが、デュークはピンピンしていた。僕の顔を見るなり嬉しそうに羽ばたいた。それを見て、なおさら涙が出そうになる。

「デューク！ どうしてあんな危ないことをしたんだよ…」
デュークを叱りつとして、僕はドキリとした。

デュークの目は、真っ直ぐ僕を見ていた。
まるで、何かを訴えかけるように。

僕には、デュークの言葉はわからないけど。
その目線の意味は、わかる気がした。

「デューク、お前……、まさか僕に戦えって……？」

返事をするように、デュークは一際大きな声で鳴いた。

そうだ、戦わなくちゃ！ 助けなきや！

村の人たちを。そして、シーアを。

だけど、どうしたらしい？

僕には、力も、武器もない。

何か良い方法はないだろうか？

あたりを見回すと、家屋から焼け落ちた丸太が一本、落ちていた。

そうか、これなら……。

アイツは意外にも、炎を吐く時、特定の場所を狙つて吐いている。
魔物は知能が高いのだと、シーアは言つていた。

僕は閃いた。

本当に、一か八かの方法だけど。
或いは、うまくいくかもしれない。

シーアは、新たな矢を取るつとして、もう矢が残つていないこと
に気がついた。

ドラゴンが、勝ち誇つたよつて、シーアに向けて炎を吐く準備を
している。

不意のことに、シーアは避けることができず、立ち戻りしていた。

僕は大急ぎでシーアを突飛ばし、かばつた。
ゴオオオオ。

もろにくらつことは避けられたが、熱気が背中に当たる。
背中が焼けそうなほど熱くなつた。

「エ、エンノイアーー？」

シーアが目を見開いて驚いている。

僕は、シーアをかばうようにして立つと、ドラゴンに向かつて声
高に叫んだ。

「やいワイバーン！ 村を焼くなんてずるいぞー！ 僕と正々堂々勝
負しろ！ 負けたら大人しく帰るんだぞー！」

シーア含めて、周りの人たちは皆『何を言つてるんだコイツは…
…』と言わんばかりにぽかんとなつてしまつた。

ドラゴンにこんなこと言つてもしづがないと思つ
でもセリフはどうでもいいんだ。

ヤツの気が引ければ。

僕は方向転換して、ドラゴンを挑発するよつに走つた。
狙い通り、ヤツは僕の後をついてくる。
身を低くし、炎を吐く準備をしている。

徐々に高度を下げ、手の届くほどの中になつた。

そしてついに、大きく息を吸い込んだ……。

今だ！

僕は、さつき見つけた丸太を拾い上げると、それを勢いよくドラゴンの口にねじ込んだ。

やつた！

突然のことによつて、ヨンは田を白黒させながら動搖している。

必死に足をハタつかせるか、丈太はトトロの口にビタリとしまつてるので、なかなか取れない。

れぬ、いわどどじゆをあわせば……」

「……」で、僕は、自分の作戦の致命的なミスに気づいた。
僕にはドラゴンにとどめをさす手段がないのだ。

その時 心いは肩を叩かれ 声が聞こえた

卷之三

シーアは腰のベルトから短剣を取り出ると、未だ暴れていのドワゴンの腹に突き立てた。

ギャオオオオオオオオオオオオ！！

耳をつんざくよつな悲鳴が、村中に響き渡る。

シテ方整し、免役を拒め、

卷之十四

さるはもう一撃加えようと 食を構える
と、その時。ふいにドラゴンが翼をはためかせた。

翼に弾を飛ばさねるシー・ア。

ドリゴンはそのまま浮上すると、一気に飛び去ってしまった。

「ちつ、長い剣ならどうめがせたの?」

シアーラがひとりごちた。

「シアーラ！」

僕はシアーラに駆け寄った。さっきの肩の怪我と、服の背中が少し
焼けていること以外は、特に大きな怪我はないようだ。

「この、ばか！」

ポカッ。

あれれ、てっきり褒められると思っていたのに。いきなりこづか
れてしまつた！

「なんて無茶なことをするんだ！ 失敗したらどうするつもりだつ
たんだ！？」

再び手を振り上げた。またたかれると思い、とっさに田をつぶ
ると……。

「……だけど。お前見かけによらず勇気あるんだな。感心したぜ」

シアーラはそう言って、僕の頭にふわりと手を置いた。
そつと田を開けると、シアーラは笑っていた。

その様子を見て、胸に何か、熱いものが込み上げてきた。
この国に来てよかつた。シアーラに会えてよかつた……。
大げさだけど、僕は、そんな気持ちになつていた。
僕は笑つて、シアーラとハイタッチした。

森の方から、何人かの人の声が聞こえてきた。
避難していた村人たちのようだ。

あの少女が言つていた通り、村人の中には、老人と女子供しか
見当たらなかつた。

その中の、リーダー格と思しき老人が前に進み出た。

実のところを言つと、僕はちょっと不謹慎な期待を抱いていた。
はつきり言つて、僕たちはヒーローだ。この村を救つたんだから。

だからきっと、この後、村長に感謝の言葉なんかを言われて、村中の女の子にちやほやされて、村に伝わる宝なんかを貰つたりして。そんな勝手な想像をしていた。

しかし、男の口から告げられたのは予想外の言葉だった。
「お前たちは余計なことをしてくれたな」

「え……？」

「見る。村はすっかり焼かれてしまった。これで明日からどうやって暮らせというんだ」

そ、それはそうだけど……。

村が焼かれたのは僕たちの責任じゃない。

すると、その男は僕の隣にいたさつきの少女を見た。

「その娘を差し出せば魔物も大人しく帰つてくれたかも知れんのに

……」

「そんなあ……！」

助けを請うように、シーアの方を見る。

しかし、シーアは、皮肉っぽい笑いを浮かべ、

「だから言つただろ？ 助けても無駄だつて」

そう言つて、村の外へと歩き出してしまった。僕も、村人たちに追われるようつに、村を出た。

あの少女が、物言いたげに、村を去る僕たちを見つめていた……。

第七話 草原の都

村人たちに追われるよつに村を出た僕たちは、再び都に向けて歩き出した。

「そりや、感謝されたくて助けたわけじゃないけどさ。なにもあんな言い方しなくても……」

僕は、黙々と前を歩くシーアに、愚痴をこぼし続けていた。

「それに、納得いかないよ！ 村のために、あの口を犠牲にしようだなんて！」

すると、ずっと押し黙つたまま歩いていたシーアが、初めて口を開いた。

「人間なんてそんなもんさ。自分の利益のためなら、平氣で他人を踏みにじるんだ……」

この言葉には、胸を締め付けられる思いがした。

それはおそらく、彼の経験から出た言葉なのだろう。

少女を助けることを、無駄だと言つたシーア。きっと、今までにも、幾度となく人に傷つけられ、失望させられてきたのだろう。

それこそが、彼の、人間嫌いの所以なのかも知れなかつた。

「あの……！」

ふいに、後ろから呼び止められた。

振り返ると、先ほどドラゴンにさらわれそつになつた、あの少女が立つていた。

一人で僕らを追つてきたのだろう、隣には母親と思しき女性も立つてゐる。

少女は、かすり傷をおつた右腕に包帯を巻いていた。

「やあ君はさつきの。もつ怪我はいいの？」

「は、はい。お陰様で。あの、それより……」

少女はなんとも辛そうな表情で話を続けた。

「さつきの村長の言つたこと……。どうかお気になさらないで下さい。近頃は魔物の襲撃が多く、村の者も気が立つていいんです」

僕は驚いた。

この少女は、僕たちを励ますためにわざわざ追いかけてくれたのか？

「それに私は助けていただいてすゞく感謝します！ だからどうか……気を落とさないで下さい……」

最後の方は、まるで懇願するようだつた。

どうして、この少女を犠牲にするなどできるだらう。
こんなに優しい女の子なのに……。

さつきの男（おそらく村長と思われる）の言葉が、胸に突き刺さる。

僕は、精一杯の笑顔で答えた。

「大丈夫。全然気にしてないよ！ 君にそう言つてもらえてよかつた」

全然気にしてないつていうのは……嘘になるかもしれない。

しかし、少女は僕の言葉を聞いて、とても喜んでくれたようだ。

「そうだ！ あなた達は旅の方ですよね？」

旅なんて大げさなものじゃないが、曖昧につなづいておく。

「うちのトライちゃんを使って下さい！」

「トライちゃん？」

「うちで飼つてるんです。元々はこの森にいるモンスターなんですけど。人に慣れてるから大丈夫ですよ！ 今連れてきます！」

そう言つと、少女はまた村の方へと駆けていった。
なんか嫌な予感……。

「これが、うちのトトちゃんです。」

そう言つて少女が連れてきたのは、はじめこの国に来た時に襲われた、あの雑草モンスター トリプスだつた。

僕とトライアスはど二も相性が合わないらしい
その『トライアス』は、僕を見るなりうなり声を上げ始めた。
そして、案の定、僕を追いかけ始めたのだった。

「うわああああああああーーー！」

ここは、アイオリアの都、アエロポリス。

賑やかながらも、気品ある城下町では、今日も新鮮な食材を売る市場の声が響いていた。

家々の白い壁が、春の日差しを受けて輝いている。
街の最深部には、円柱状の柱で支えられた、王宮が見える。

柱には植物の蔓が巻きついていて、どこか有機的で優美な雰囲気を醸し出している。

王宮の広間では、見るからに善良そうな顔をした老若男女が、目を輝かせながら、王の登場を今か今かと待っていた。

男が歩いてくる。

王宮の奥へと続く廊に近づくと、見張りの兵士が、男に軽く会釈した。

兵士は、モヒカン頭のよくな飾りの、一した兜をかぶり、サンタルを履いている。

「ハセヒロ、おまえ、隠岐の島へお出でにならぬか？」

少しいらだつた調子で、男が尋ねる。

「中庭に行かれましたよ」

「中庭！？ お一人ですか？」

「はあ。何でも大事なお客様がいらっしゃるそ�で……」
客が来るなどなど聞いていない。男はあからさまに怪訝な顔になつた。

「客？」

「ねえシア。これつて端から見たら結構恥ずかしいよね」

「言つなよ。これだつて歩くよりや速いんだぜ」

森を抜け、村を出て、小高い丘に辿り着いた僕たちは、トリップスの背に揺られながら、一路、都を目指していた。

「ほり、見えてきたぜ。王都アエロポリスだ」

丘から見下ろしたところは、一面の草原になつていて、
シアが指差した先を見て、僕は息を呑んだ。

丘の下は、その街を除けば、ただただ草原が広がるばかり。
大海原に浮かぶ一艘の舟のように、都は草原の中に忽然と姿を現した。

真っ白な建物と青々とした草原との、コントラストが美しい。
街は円形の城壁に囲まれているのだが、城壁の外まで建物がはみ出していて、大きな街であることがわかる。

街の奥の方には王宮らしき巨大な建物と、神殿のようなものが見えた。

どちらも白大理石でつくられたエンタシスの柱。
僕は、古代ギリシャの遺跡を思い出した。

「すごい……」

僕が思わずつぶやくと、横に座っていたシーアが得意そうにほほ笑んだ。

「この地は……いや、このアイオリアから北のチュートニア、東のアディスに至るまで、かつてテラステイアという巨大な国が支配していたんだ。エロポリスはそのテラステイアの遺跡の上につくられた街だ。だから今でも千年前の雰囲気を残している。ほら、街の周りにもいくつか遺跡が見えるだろ？」

普段は無口なシーアが、急に饒舌に話しだしたので、僕は驚いてしまった。

でも、見れば確かに、街の周りに遺跡のようなものが見える。城壁の周りには、朽ちた神殿の柱や、がれきが散乱している。その遺跡群と、現在都に建てられている建物があまり違わないことから、シーアの言つ通り、都は千年前の、テラステイアという国の様式を引き継いでいるらしかった。

それにしても……。

シーアの話に出てきた地名、すべて聞いたことがない。僕は本当に、違う世界に来てしまったのだろうか……。

バサツバサツ。

落ち込んでいると、聞き覚えのある羽音が頭上に響いてきた。

ドラゴンだ！

つい先ほども僕たちを苦しめたあのドラゴンが、都の上空を飛んでいた。

「まさか都を襲う気！？」

「もうそれほどの体力はないと思うが……見つからない方がいいなシーアとそう話した時、目の前で信じられないことが起こった。突然、ドラゴンが飛んでいる付近だけが曇りだしたのだ。

そして雲の合間から閃光が走り、雷の筋がドラゴンに命中した。

あつとこう間に黒焦げになり、墜落していくドラゴン。

突然の出来事に、僕もシーアも何が何だか分からなかつた。

「魔法だ……」

シーアがつぶやいた。

「大きな街には魔法を使える神官がいるんだ。きっと、都の神官が、雷の魔法で倒したんだろう」

魔物や魔界が存在するくらいだ。魔法と聞いても、もはや驚かなかつた。

でも、すごいな。

弱ついていたとはいえ、あんなに強いドラゴンを一撃で仕留めるなんて！

ドラゴンの末路を見届けてから、僕たちは再び都を田舎しトリップスを歩ませた。

いよいよ『プネウマの鏡』のある、都へ。

それを壊せば、母さんをロバートから取り戻してもらひえる。

本当に、そんなことができるんだろうか？

仮にできたとして、僕は無事に元の世界に帰ることができるんだろうか。

胸にあるのは、不安か、期待か。

一步一步都に近づくたび、僕は、胸の鼓動が早まるのを感じていた……。

第八話 王宮へ

シーアの予想は当たっていた。

都の上空を飛ぶ魔物を仕留めたのは、都の神官、アーサー・クロアであった。

水色の髪を緩く束ね、白い上着を羽織つている。

「全くどうなつているんだしじょうね、都の警備は……」

「アーサー様、お一人で倒すなんて無茶なことを……」

付き添いの兵士が、心配そうに言った。

兵士の手には、神官が集めた薬草が持たされている。

「あんなの雑魚ですよ。どういうわけか手負いでしたし」

神官は、手近に生えていた薬草を採つた。

「おつと。早く王宮に戻らないと王様に叱られちゃいますね

白大理石の柱で支えられたその建物に、たくさんの人が出入りしているのが見えた。

兵士らしき姿も見える。

「じゃ……俺はこれで」

「えつ」

僕は思わずシーアの方を見た。
そうだ。都まで連れて行つてもいい、つていう約束だつたもんな。
都に着いたら、もうお別れだ。
でも……。

「品物売るといひまで手伝つよー。ほら、仕事手伝つて言つたし！」

無理に頼んで都まで連れてきてもらつたんだ。このまま別れるのは何だか悪いような気がした。

しかし、彼は軽く追い払つよつた仕草をして、言つた。

「いーよ別に。それより王宮に用事あるんだろ？ 早く行けよ」

「うん……。ありがとう、シーア」

シーアは軽く肩をすくめてみせた後、踵を返し、さつさと反対方向に歩き始めた。

もともと人間嫌いだつて言つてたぐらいだ。彼らしく、実に淡白な別れ方だった。

でも、もう一度と会えないかもしれないのに……。

ちょっとびり寂しい気持ちになりながら、王宮に向けて歩き出そうとした時だった。

「あつ。そうだ」

シーアが、ふと思いついたように、匕首を振り返つた。

「持つてけ」

腰のベルトから何かを取り出し、匕首に向かつて投げる。
取り落とさないよつて気をつけながら、それを受け取つて、手中を確認すると……。

それは、短剣だった。

複雑な組み紐模様のついた、黒い鞘。

シアアが、あのドラゴンと戦ったとき、使っていたものだ。

「やるよ。丸腰じゃ何かと不便だろ」

僕が、ドラゴンと戦う時、武器がなくて困っていたのを知っているのだろうか。

何か熱いものがこみあげてきて、僕は叫んでいた。

「シーアー！！ いろいろとありがとうー！！ 元気でねー！！」

再び向きを変え、歩きだそうとしていたシアアに向けて、大きく手を振る。

シアアは後ろを向いたまま、そつけなく手を振り返した。

……そして、今度こそ本当に、立ち去つて行つた。

「さて、と……」

僕は、もうつた短剣をズボンのベルトに差し込むと、王宮の入り口へと続く階段を上がつていった。

いろいろあつたけど、ついにここまで来たんだ。

あとはプネウマの鏡さえ壊せば……。

王宮に入った僕は、驚いた。

入り口のすぐ先は大広間になつてゐるのだが、そこに溢れんばかりの人人がいたのだ。

街の人であるうエプロン姿の人から、旅人らしき人まで、様々な人たちが、王宮の大広間に詰めかけていた。

莊厳な王宮の様子を想像していた僕は、すっかり拍子抜けしてしまった。

どうして王宮の中にこんなに人がいるんだろう。

僕は、近くにいた男に尋ねてみることにした。

見るからに人の良さそうな老人で、僕を見てにっこり微笑んで答えてくれた。

「お前さん、他所から来たのかい？ 王様は毎口この広間にいらっしゃつては、ワシらの質問や要望に直接応えて下さるんじや。だから皆、王様に話を聞いてもらおうと詰めかけとるんじやよ」
「へえ……。

「あ、ほら。いらっしゃつたぞ」

老人が指差した先に、それらしき人物が見えた。

周りを兵士に守られながら、一段高くなつた場所に立つてゐる。全身をすっぽり覆つたローブに、白いベールという、質素な出で立ちだ。

ベールを口深に被つてゐるので、顔はよく見えない。

王が現れたことで、広間が騒がしくなつた。

老人の言つた通り、広間にいた人々は一斉に王に詰めより、質問や要望を投げ掛けている。

ここからではあまりよく見えないが、王は動じることなく、ゆつたりとした語り口で一人一人に応対してゐるようだ。
だけど、どうやってプネウマの鏡を探そう……。

この様子だと、とても王に近づけそうにない。
と、その時……。

「あつ！ デューケ！ どこに行くんだよ！」

肩にとまつっていたデューケが、勝手に飛び立つてしまつた。

周囲にひしめいている人々を必死にかき分けながらデューケを追うと、デューケは広間の脇にある廊下へ向かつたようだつた。

勝手に王宮の内部へ入つていいのかどうか、一瞬悩んだが、このままデューケを放置するわけにもいかないので、僕は後を追うこととした。

廊下の先は、中庭になっていた。

建物が中庭をぐるりと囲み、回廊になっていた。

中庭の真ん中には優美な噴水があり、周囲には豊かに茂った広葉樹が植えられている。

しまった！

中庭に見とれているうちに、デューコを見失ってしまった。

中庭の木の枝にでもとまつたのか？

そう思つて、植えられた木を見回していると、一人の女性の後ろ姿が目に入った。

その姿には見覚えがあつたが……その時はそれが何なのか、思い出すことができなかつた。

僕はその女性に、デューコを見なかつたか、尋ねることにした。

「あの……」

声をかけると、ウェーブのかかつた長い髪を揺らしながら、その女性は振り返つた。

……僕は息を呑んだ。

目元を覆い隠してしまつほど長いまつ毛に、すんなりとした鼻、きゅつと結ばれた上品な唇。振り向きざま、ふんわりと良い香りがした。

僕はこれほどまでに美しい女性を見たことがない。

この時の気持ちをなんと表現したらいいんだろ？

僕は、一目で彼女のところになつてしまつた。

その女性は、なんとも変わつていた。

髪の色が水色だつたのだ。

水色の髪なんて、見たことも聞いたこともない。

しかし、その水色の髪は彼女の美しい顔立ちに違和感なく溶け込

んでいる。

「あのー…何か私に用があるので…?」

「あっ、すいません!」

「いけない、いけない。

「彼女に見とれて、声をかけた理由を忘れるところだつた。
「黄色い鳥を見ませんでしたかー? 」 うつ、トサカみたいな羽の立
つた……」

すると、彼女は惚れ惚れするほど美しい微笑みで、答えた。

「それは、この子のこと?」

「彼女が軽く手を擧げると、どこからかデューグが飛んできて、彼
女の手にとまつた。

「一体どうなつてゐんだ??

「どうもありがとー!」

「無事、デューグを見つけた僕は、本来の目的を忘れ、木の下に腰か
けて、その水色の髪をした女性と“おしゃべり”をしていた。

「僕、エンノイアつていいます! あ、ここにはデューグで「
ちやつかり自己紹介しておぐ。

「ふふ。私はルイーズよ。よろしくね、エンノイア、デューグ」
そう言つて、ルイーズは僕の手を握つた。

「ふわあああ……。なんて柔らかい手なんだらう。
ちなみに、彼女は僕よりもずっと年上のようだ。

ひょっとしたら、母さんと同じくらいの年かもしれない。(母さ
んは僕を十代の時に産んだから、他の家の親に比べたら若い)
でも……母さんとは全然違う……。

「さてと、そろそろ行かなくつちや
ルイーズが立ちあがつた。
ベルを取り出し、かぶる。

その様子を見て、僕は電撃が走つたよつに閃き、無意識にある言
葉を発していた。

「もしかして……王様……？」

ルイーズが驚いたように目を見開いて、僕を見ている。自分でもなぜそう思ったのかわからない。

王様はさつき広間にいたじゃないか。

服装も違うし、時間的に考えても、さつき広間にいた王らしき人物がルイーズだとは思えない。

それなのに、直感とでもいうのか、ルイーズこそが『王』だ、という気がしてならなかつた。

しばらぐの沈黙。

僕が変なことを言つたので、怒つたのかもしれない。

僕は、不安になつてきた。

しかしルイーズは、なんとも気の抜けるような明るい声で言つた。

「あら？ どうしてばれちゃつたのかしら？」

手を顔に当てながら、いたずらっぽく笑つてゐる。

ええええ！？

そ、それつて、どういづ……。

すると、彼女はくすくす笑いながら、

「広間にいたのは私のイトロよ。私たち、姿が似てゐるから、時々ああして代わつてもらうの」

おいおい、王様がそれでいいのか……。

僕はすっかり気が抜けてしまつた。

いいや。気が抜けている場合じやないだ。

ルイーズが王様とわかれば、やるべきことは一つ。

僕は、意を決して聞いた。

「プネウマの鏡を見せてください……」

うるく

第九話 プネウマの鏡

「プネウマの鏡を見せてください……！」

アイオリアの王をして、僕は頼んだ。
プネウマの鏡を壊せば、母さんを取り戻せる。今はただ、そのことだけが、頭にあった。

「いいわ」

意外にも、アイオリアの王、ルイーズは、こともなげに答えた。
しかし、気のせいだろうか……。彼女の表情が、少し曇った気がするには。

心なしか、彼女の目が、僕を哀れんでいるように見えた。

ルイーズに付き従つて、王宮の廊下を進む。

いくつもの廊下と階段を通り、最上階の、最も奥にある部屋へと辿り着いた。

部屋の前には、二人の兵士が控えている。他の兵士たちと同じように、モヒカン頭のヘルメットを被り、腰に差した剣の他に、手には槍を持っている。

「陛下！ もうお戻りですか？」

「ええ、通してちょうだい」

兵士たちは初め僕をいぶかしながら、やがて道を開けた。

植物の蔓が描かれた優美なデザインの扉が、兵士によつて開かれ る。

扉を開けると、中は体育館のように大きな部屋が広がっていた。
王宮の正面と同じように、この部屋にも壁面や柱に植物の蔓が巻き付いている。

部屋の入り口から見て左側には大きなバルコニーがあり、春の陽

がさんさんと射し込んでいた。そして、右側には……。

聞かなくてもわかる。プネウマの鏡だ……。

「メートルほどもある大きな姿見。鏡の縁には奇妙な文様が彫り込まれている。

何かが映つてているようだが、ここからではよく見えない。

「この鏡は、この世と魔界を隔てているのよ。この国にひとつなくてはならない物なの」

ルイーズが話し出した。

「だから……」

ルイーズは僕の目を見て、静かに言った。

「誰かに壊されでもしたら、大変なことになるわ」

「！」

僕は、心臓が飛び上がるほど驚いた。

知っているのか……？ 僕がこの鏡を割りにきたことを。

目の前が真っ暗になる。緊張と恐怖で息ができない。

バレていたんだ、始めから……。

さっきまでは美しいと思っていた彼女の姿が、恐ろしい魔物のようになんで見えた。

「 丈夫？」

「え……？」

「大丈夫？ 顔が真っ青よ」

気がつくと、ルイーズは僕の肩に手を乗せ、心配そうに覗き込んでいた。

別段、怒つてはいない。どこか悲しそうに見えること以外は、さつきまでと変わらないようだった。

そ、そうだ、落ち着け。まだバレたとは限らないじゃないか。

改めてルイーズの方を見ると、相変わらず綺麗な、優しい顔で、魔物なんかではなかつた。

「もしも……もしもこの鏡が割れたら……どうなるんですか？」
怪しまれぬよう、慎重に尋ねる。自分でも声が震えているのが分かつた。

「魔界が現世にまで広がり、今まで以上に魔物があふれかえるでしょうね。そして人間も動物も、魔物に食われてしまうでしょう」
そんな……。

僕は悩んだ。

そんな大事になるなんて。僕はただ、母さんを取り戻したいだけなのに……。

一瞬にして、記憶がさかのぼる。

閑静な住宅街に建てた、庭のついた、大きな家。

父さんだつて、昔は優しかつた。休日はよく三人で出かけたものだ。

近所でも仲のいい家族として有名だつた。

ある日、父さんは怪我をして、仕事を失い、その日から生活は一変した。

僕らは安いアパートに引っ越し、母さんも仕事を始めた。それでも、三人が一緒なら、僕も母さんも満足だつた。

しかし父さんは違つたようだ。

職を探そうともせず、酒ばかり飲み、毎日、夜の街を遊び歩いた。母さんと喧嘩が絶えなくなり、暴力をふるつようになつた。母さんは毎日帰るはずもない父さんの晩ご飯を作つては、泣きな

がら捨てていた。

もう、母さんにそんな思いはさせたくないんだ。
母さんはばかだから、優しすぎるから。

僕が守らなきゃいけないんだ……。

不思議なことに、ルイーズは黙つたままの僕をどこか悲しそうな表情でずっと見守つていた。

ここは僕の住んでる場所とは違う世界だ。何が起きたつて、僕には関係ない。

そうだ。

大変なことになる前に逃げればいいんだ……！

ついに、僕は決心を固めた。

その時、ルイーズが再び『大丈夫?』と聞きながら僕に近づいてきた。

ドンッ！

僕は彼女を軽く突き飛ばし、目の前に置いてあつた椅子に手をかけた。

そう、これで鏡を割るのだ。

ブネウマの鏡に近づき、手に持つた椅子を大きく振りかぶる。そうして、椅子を鏡に向けて放り投げた。

いや、放り投げようとした。

しかし、それはかなわなかつた。

驚くべきことに、気がついてしまつたからだ。

「僕が……映つてない！！ 周りの景色は映つてゐるのに僕だけ……」

「どうして…？」

僕は叫んだ。

鏡に映っていたのは、椅子を振り上げた僕自身の姿ではなく、逆さまになつた椅子が、不自然に浮かんでいる姿だつたのだ。

肩に、そつと手が触れる。

鏡の中では、ルイーズの両手が、何もない空間に置かれていた。そして、そつとつぶやいた。

「この鏡はね、悪い心を持つた人間は映らないのよ」

はつとして、振り返る。

ルイーズは、とても悲しそうな顔をしていた。

一気に、力が抜ける。

持つていた椅子を取り落とし、僕はへたり込んでしまつた。

「ごめんなさい……ひょつとして僕……すごく自分勝手なことを…」

…

よつやく田が覚めた。

僕は、なんてひどいことをしようとしていたんだろう。

自分の身勝手な考え方で、この世界を シーアや、あの村の
女の子や、ルイーズの住むこの国を めりやけりやにしてしまう
としていたんだ。

自分の浅はかさに、涙がこぼれた。

「思った通り……あなたは優しい人なのね。一度は悪い心に負けてしまつたけれど、他人を思いやる心はちゃんと持つている。ほら、もう一度鏡を見てごらんなさい」

ルイーズに言われて、恐る恐る鏡を見る。

まだ周りの景色に比べて、少し薄いけれど、今度はちゃんと、僕の姿が映つていた。

でも、『思った通り』って……？

ルイーズが言った。

「試すようなことをしてごめんなさい。あなたがどんな人間か、知りたかったの。ほんとはね……」

ルイーズは僕が落とした椅子を拾った。そして、なんと鏡に向かってそれを投げたのだ。

鏡が割れる！

衝撃に備えて目をつぶろうとした時、鏡から光のようなものが出て、大きな音と共に、椅子を弾き返した。

僕は、慌てて鏡の表面を触る。当然ながら、傷一つ付いていない。

「プネウマの鏡はそう簡単には壊れないわ」

彼女はそう言つと、振り向いて、微笑んだ。

「申し訳ないけど、プネウマの鏡を壊せば願いが叶うといふのは嘘よ」

僕は、はつとしてルイーズを見た。
どうしてルイーズがそのことを……。

ルイーズが軽く手を上げると、先ほどと同じようにデューコークが飛んできて、彼女の手にとまつた。そして彼女はデューコークを肩に乗せると、おもむろにことの真相を語り始めた。

その時のルイーズは、今までのようやんわりとした雰囲気ではなかつた。意志の強そうなその表情は、まさに女王と呼ぶべき威厳に満ちたものであつた。

「私は、アイオロスにあなたを連れてくるよう頼んだの。そして、私はあなたを試した。今のところ、合格と言えるわ

「どうしてそんなことを……」

ルイーズは、大きく息を吸うと、僕の目を見て、静かに、ゆっくりと言つた。

「あなたが、この国の新しい王だからよ」

僕の新しい運命が、今、始まろうとしていた……。

つづく

「え……？」

アイオリアの王、ルイーズが語つたのは、信じられない言葉だった。

僕が『この国的新しい王』……？

「それってどういう……？」

こと、と言いかけた時、ふいにカタカタと物音が聞こえ始めた。机の上にのせられていた花瓶が、音を立てて震えていたのだ。

「！？」

ガシャアアアン！！

ついに、花瓶は机から滑り落ち、割れてしまった。

途端、空気が淀む。妙な圧迫感で、息が詰まりそうだ。ルイーズの表情から、緊張が見てとれる。何か、禍々しい事態が起ころっているのだということは、僕にもわかった。

突然、バルコニーからものすごい風が吹き付けた。思わず目を閉じる。

風がおさまったところで、薄田でバルコニーの方を確認すると、どこから入ったのか、黒いローブを着た男が立っていた。

その男を見た瞬間、僕は恐怖で凍りついた。

目はフードで隠されているが、まるで生氣のない顔。ローブから覗いた手は、妙に青白く、不自然に筋くれだつていた。

「面白いものを見させてもらつたよ」

男が口を開いた。耳に残る、ざらついた不快な声。ルイーズは男を見るなり、顔をこわばらせ、叫んだ。

「バイバルス……！！」

バイバルスと呼ばれたその男は、神経を逆撫であるように、クククと笑った。

「覚えていて下さって光榮です、陛下」
わざとらしくお辞儀をする。

会話の様子から、ルイーズと男は面識があるようだつた。それが決して好意的な関係でないことは、一目瞭然だ。

「近頃、魔物に町や村を襲わせているのはお前ね、バイバルス！
一体何が目的なの！？」

男は、なおもからかうように笑い続ける。

「あのお方がもつと多くの魂を集めよ、と仰るのでね……」

ルイーズの美しい顔が、怒りで歪む。

「ここはお前のような者が来る場所ではないわ！ 早々に立ち去りなさい！」

ルイーズは、大きく右手を振りかざした。すると驚くべきことに、何もない手の中から、巨大な炎が放たれた。

「魔法！？」

僕は叫んだ。

そうだ！ これこそが、シアアが言つていた『魔法』に違いない。
文字通り、ルイーズは何もない空間から炎を生み出したのだ。

放された炎は、ロープの男めがけて一直線に飛んでいった。

しかし、男は全く動じる気配がない。

そして、炎が男を包み込もうとしたまさにその時……！

ガキイイイイイー！

まるで、男の周りに見えない壁があるかのようだ。炎はバリアの
ようなものに弾かれ、あとかたもなく消えてしまった。

男は火傷一つ負つていない。

この状況を楽しんでいるのか？ 不気味な笑みを浮かべながら、
言った。

「いやいや、相変わらず貴女の魔力は素晴らしい。だが……」

男はどこからともなく杖を取り出した。本の中の魔法使いが持っているような、先の曲がった木の杖だ。

「今私にはかなわんよ！！」

叫ぶと同時に、男は杖から炎を放った。

何もない空間から炎を生み出したのはルイーズと同じだが、男の場合、その炎の規模がまるで違っていた。それは、あの村を焼いたドラゴンの炎に匹敵するほどだ。

僕が立ちつくしていると、ルイーズは僕を突き飛ばした。そして、僕をかばうにして、その炎をもろに受けてしまった。

「キヤアアアアアアアア！」

恐ろしい悲鳴。

思わず目を閉じた僕は、その姿を見ることができなかつた。

しばらくして、炎がおさまつた。

通常の炎なら、こんな短時間に炎が勝手におさまるといふことはないんだろうけど。きっと魔法の炎だからだろ？ 炎は次第に弱まり、部屋には煙だけが残つた。

「王様！！」

なんと、ルイーズは無事だつた。服は無残に焼け焦げているが、肌には煤が付いているだけで、火傷は一切していなかつた。

僕は、倒れているルイーズに駆け寄つた。

よかつた。意識はあるようだ。

「直前にバリアを張つたのか。やはりなかなかあなどれん。しかし、その美しい顔に傷がつかなくてよかつたよ」

他人事のように話す男。僕は心の底から怒りがわいてきた。

事情は知らないけれど、この目の前にいる男が、とんでもない悪党であることだけは間違ひなかつた。

僕は怒りのままに、男に向かつて叫んだ。

「お前何者だよ！？ どうして王様にこんなひどいことを…！ 許

さないぞ！！

男は全く動じることもなく、むしろ興味深げに僕をまじまじと見た。

「ほつ……面白い。お前が新しい王だな？ しかもその服装……異世界のものだな」

「！？」

僕は動搖した。

普通、『異世界』などという概念を、容易に理解できる人間がいるだろうか？ 実際に『異世界』と思われる場所へ来てしまった僕でさえ、信じられないのに。

しかし、この男はいとも簡単に僕が違う世界から来たことを見破つたのだ。

その時、倒れていたルイーズが、僕の名前を呼んだ。

「……げて」

「え？」

「逃げて……！」

ルイーズの悲痛な叫び。

僕は叱りつけるように、言った

「逃げません！ 王様を置いていけるわけないでしょー！？」

この女性^{ひと}が僕にとつて敵なのか、味方なのか、まだわからない。ひとを勝手に試したり、違う世界に連れてきたり。ひどいと思つ。

それでも今は、この女性^{ひと}を守らなければいけない。なぜだかわからないけど、僕は、そう思った。

כָּנָעַן

第十一話 間よりの使者 part 2

男はすでに、次の攻撃に取りかかっていた。

「誰が王になろうと同じ事……私の邪魔はさせん！！」

男から、無数の黒い糸のようなものが飛び出した。

その糸はルイーズをしばりあげると、彼女を高々と持ち上げた。巻きついた糸が、彼女の腕や胸を痛々しく締め付けている。

僕はルイーズを助けようと、走りだした。

しかし、一瞬ふわりと浮きあがる感覚がしたと思うと、みるみる床が遠ざかっていった。

「うわあああ！？」

いつの間にか僕の足にも糸が巻きついていたようだ。右足に巻きついた糸で持ち上げられ、僕は、逆さまの状態で、宙づりになってしまった。

当然、全体重を支えることになってしまった右足。足の付け根が、引き裂かれそうなほど痛んだ。

「何するんだよ！放せよ！！」

男は全く見向きもしない。

「バイバ尔斯、エンノイアを放しなさい！ その子は関係ないはずよ！」

「さてね。それはどうかな。この少年はいすれ王になるのであるつ？」

？

男の声のトーンが変わった。

「ならば……今のうちに始末しておいた方が都合がいい

「うあ……っ！？」

男が言つと同時に、巻きついた糸が足に食い込んだ。強烈な痛みが走る。

まことに、そのままじや、本当に殺される……！

母さんの顔が浮かんだ。

お願いだ。せめて、もう一度だけ、母さんに会いたい。

だから、それまでは死にたくないんだ……！

「ピピッ！」

デュークが、心配そうに僕を見ていた。

しかし、残念なことに、鳥であるデュークにはどうすることもできないようだ。

「ごめん……。僕、もうダメかもしない……」

僕は、デュークに言った。

コツン。

デュークは、クチバシで僕のズボンのベルトをつづいた。

コツコツコツコツ。

注意を引くように、何度もつづき続ける。

「何だよデューク。ベルトがどうかして……」

僕ははつとした。

そうだ！ シーアにもらった短剣！

王宮に入る前、シーアは、丸腰では不便だろうということで、僕に短剣をくれた。

その短剣を僕は、ズボンのベルトに挟んでいたのだ。

僕は、男を見た。

ルイーズと何か会話しているようで、今は僕の方を見ていない。

僕は気付かれないように、慎重に手を伸ばした。

逆さまの状態で腰に手を伸ばすというのは、かなり根気のいる作業だったが、ようやくベルトに挟んだ短剣に手が届いた。

そつとその短剣を鞘から抜き取る。

剣を持つことなど、初めてだ。

抜き取った瞬間、手にずしりと重みが伝わった。

僕は初め、その短剣で糸を切ろうと思つた。
しかし、この姿勢で足に巻きついた糸を切るというのは、到底無理な話であった。

そこで僕がとった行動は……。

男に向かつて、その短剣を勢いよく投げることだ。

ヒュンッ！

ドライゴンを射るのには失敗した僕だったが、今度は上手くいった。短剣は風を斬りながら、真っ直ぐに男の方へと飛んでいった。

男は慌てて振り向くと、先ほどと同じようなバリアを張つた。そしてそのバリアに、短剣ははじき返されてしまった。

しかし成果はあった。

突然のことに、男はひどく動搖したようだ。
そのせいなのか、一瞬僕に巻きついていた糸が緩んだのだ。
僕は足を振りまわし糸から抜け出した。

「しまつた！」

男が叫ぶ。

高いところまで持ち上げられていたので、糸から抜け出した瞬間、床に激しくたたきつけられた。

しかし、痛がっている場合ではない。僕はすぐさま入り口のドアへと駆けた。

ドアに手をかけたところで、ふと思案し、僕は男とルイーズのいる方へ振り返った。

「王様ー！！ 必ず助けるからねー！！」

僕はルイーズに向かつて叫んだ。

見捨てるんじゃない。見捨てるんじゃないんだ。

だけど今の僕は、ここにいても、どうする事もできない。
だから……どうする？
どうすればいい！？

「エンノイアー！！」

その時、ルイーズが僕の名前を呼んだ。

「エンノイア！ リュクルゴス隊長を呼んで！」

「え！？」

リュクルゴス隊長って誰………？

「広間にいるはずよ！ お願ひ……リュクルゴスを……リュクルゴス隊長を呼んで！！」

「わ、わかった！」

それが誰なのか、その人を呼んだらどうなるのか、わからなかつたが、とにかく僕は部屋の外へと走った。

「ほう。その隊長とやらが来るまで待つていてやううではないか」

男は不敵に笑つた。

「……後悔するわよ」

それに対抗するように、ルイーズは強気な笑みを浮かべた。

第十一話 リュクルゴス隊長

> 3 5 5 9 7 — 3 7 8 1 <

「リュクルゴス隊長！… 助けてください！… リュクルゴス隊長
ーっ！…」

声の限りを尽くして、僕は広間の入り口で名前を呼んだ。広間にいる人々が、驚いて振り返る。

「リュクルゴス隊長ーっ！…」

ローブの男から辛くも逃げ出した僕は、「リュクルゴス隊長」を呼ぶために、この大広間へと戻ってきた。幸い邪魔をされるようなことはなかつたが、広間を目指し走る僕が目にしたのは、恐ろしい光景だつた。

見張りの兵たちが、扉の前で見るも無残な状態で死んでいたのだ。骨が折れているのか、不自然な格好でぐつたりしていた。

おそらくあの男がやつたのだろう。よく見ると、死んだ兵士たちの体には先ほどの黒い糸が巻き付いていた。

僕は、悪寒がした。

こんな騒ぎになつてゐるといふのに、兵が誰も駆けつけないといふのは、どおりでおかしいと思つた。

早くしなければ、ルイーズが危ない……！

「リュクルゴス隊長ーっ！…」

もう何度も目になるかわからない。さすがに声がかってきた。と、
その時……。

「どうしたボウズ！？」

突然、肩に手が置かれた。声の主を見上げると、黒髪の、がつしりとした男であつた。長いマントを羽織り、腰には剣を差している。
「どうか！　この人が……！」

「リュクルゴス隊長！？」

「自分がそうだが……」

「王様が大変なんです！　ローブの男が現れて……！」

男の言葉を待たず、僕はルイーズの窮地を必死に伝えた。

リュクルゴス隊長はひとつうなずくと、すぐさま数人の兵士を引き連れ、ルイーズのいる部屋へと向かつた。僕も慌ててついて行く。

リュクルゴス隊長と兵士たち、そして僕は、バタバタとルイーズのいる部屋へと入つた。扉は僕が隊長を呼びに行く時に開けたままになつっていた。

「陛下ーッ！」

「王様ーッ！」

糸に縛られ、不自然に空中に浮かんだルイーズ。首をもたげてぐつたりしていた。

ま、まさか……。

僕や兵士たちも、最悪の事態を考えた。

「大丈夫……。氣絶しているだけだよ」

僕たちの考えを見透かしたかのように、ローブの男は言った。

その言葉が余計に瘤に障つたようで、リュクルゴス隊長は顔を真っ赤にして男を睨んだ。

「貴様ッ！　陛下を離せ！」

「残念ながらそういうわけにはいかんね。力ずくで取り戻したらどうだね？」

リュクルゴス隊長はスラリと腰の剣を抜くと、真つ正面から男に

向かつていつた。

「正面から攻撃するなどバカなことを…」

男から黒い糸が放たれた。

糸が隊長に巻き付こうとしたその時、隊長は大きく剣を振りかぶつた。

そしてなんとその剣で糸を叩き切ったのだ！

そのまま勢いよくロープの男を斬る。剣は男の腹をえぐり、刃の先に鮮血が舞つた。

「く……くそ……」

男はよろけながら、膝をついた。

ルイーズがこの人を呼べと言つた理由がわかつた。

強い！

僕は、初めて見る本物の剣技に、興奮していた。

つづく

第十二話 恋人

「あつ！ 落ちる！」

ロープの男がひるんだため、ルイーズを縛り、宙に持ち上げていた糸が緩んだ。当然、ルイーズの体は重力に従つて落下し始めた。僕の声を聞くやいなや、リュクルゴス隊長は剣をしまうと、素早く体の向きを変え、落下してくるルイーズをしっかりと抱き止めた。

おおおお！

思わず歓声をあげた僕。

つられて、待機していた兵士たちまでが歓声をあげた。拍手なんかしちゃつてるし。

「感心している場合か！ サッセッとアイツを縛り上げろ！」

クスッ。怒られてる怒られてる。

隊長に怒鳴られて、兵士たちはワタワタと、傷を負つて倒れているロープの男を縛りにかかった。

「う……」

その時、隊長に抱き抱えられていたルイーズが目を覚ました。

「陛下！ ご無事ですか！？」

「リュクルゴス！？」

ルイーズは、はつとして隊長を見た。

「あなたが助けてくれたのね、リュクルゴス……ありがとう」

「あ、あれ？ 気のせいかな。ルイーズの頬がほんのり赤く染まつたよ……」

すると、リュクルゴス隊長は心底申し訳なさそうな表情で言った。

「いえ……。申し訳ありません、気づくのが遅すぎました。そのせいで陛下を危険な目に……」

ルイーズは慌てて首を振った。

「いいえ！ こうして助けてくれただけで充分よ。よくぞ来てくれました」

リュクルゴス隊長はくしゃっと笑った。

「そりや、貴女のためなら地の果てだつて助けに行きますよ

「リュクルゴス……」

ルイーズの頬が一層赤くなつたように見えた。

リュクルゴス隊長はルイーズを優しく下ろすと、先ほどの炎のせいで服が焦げ、白い肌があらわになつてしまつたルイーズに、慣れた様子で自分のマントを着せてあげた。

隊長を見つめるルイーズの目は、母さんがロバートを見る時のように、よく似ていた。

なんだ、そういうことか……。

僕は、わかつてしまつた。そう、この二人は……。

そう思つた途端、さつきまで興奮していたのが、なんだかモヤッとした気持ちになつた。

それから、胸がチクチクしてきた。

所在なくして、二人の側を離れようとした時、ルイーズに声をかけられた。

「ありがとうエンノイア」

「そんな。僕は何もしてないです」

「何もだなんて。あなたは私を見捨てなかつた。そして、リュクルゴス……隊長を呼びに行つてくれた。すべてあなたのおかげよ」

僕は首を振つた。

「いえ、そんなの全然大したことじゃありません。僕は……その……隊長さんみたいに強くないし……」

「え？」

ルイーズはなぜそこで隊長が出てくるのかわからないといった感じで、小首を傾げた。突然引き合いに出されて、隊長も驚いているようだった。

ああああ……僕は何を言つてゐんだろ？
なんだか恥ずかしくなつて、僕はそそくさとその場を離れた。

リュクルゴス隊長はルイーズをかばうようにして立つと、兵士によつて縛られたローブの男に再び剣を突きつけた。

「貴様、何者だ？ 陛下を傷つけた罪、万死に値するぞ！」

隊長は毅然として言い放つた。

こんな状況になつても、ローブの男はククク……と笑つている。
血が出てゐるというのに、痛がる様子もない。

「何がおかしい！」

すると、ローブの男が言つた。

「私が何者か……。王様の方がよくご存知なのでは？」
そこにいた人々が一斉にルイーズを見る。

ルイーズは厳しい顔でうなずき、説明を始めた。

つづく

第十四話 間に蠢く者

「この男はイスマイル・バイバルス。……かつてこの国の政治家だつた男よ」

ルイーズは、このローブの男について説明を始めた。その内容を要約するところだ。

ルイーズとこの男はかつて大学の同級生だった。二人は友人で、毎日、理想の国のある方について語り合っていた。そして同じ理想を持つて、この王宮へ入つた。

しかし……ルイーズとバイバルスの考えは次第に食い違つていった。ルイーズは他民族との調和を望み、国内の安定を目指したのに対し、バイバルスはテラスティア 昔このアイオリアを含む 広大な大地を支配していたという王国（シーアが話していた）の再建、すなわち国土拡大を望んでいた。

当然ルイーズはその考えを断固拒否した。しかし自分の望みがかなわないと知るや、バイバルスは不穏な動きを見せるようになつた。今度は魔界に傾倒し、国内で禁止されている怪しげな魔術に凝るようになつたのだ。

それでルイーズはバイバルスを国から追放した……。

それが、この男とルイーズとの因縁だ。

ちなみにリュクルゴス隊長はそのころ王宮にはいなかつたので、バイバルスとは面識がないらしい。

「それで、陛下を襲つた目的は何なのだ？ 追放された復讐か？」
リュクルゴス隊長が、剣を突きつけたまま、目の前のローブの男・バイバルスに聞いた。

バイバルスは急に笑うのをやめ、ぞつとするような低い声で答えた。

「貴様らには理解できん。崇高な目的のためだ」

隊長とルイーズは何かを話し始めた。

僕はそろそろ退屈し始め、辺りをうろついていた。と、ふと縛られているバイバルスの手元を見ると、ロープの袖に何か光る物が見えた。

何だ……？ 金属みたいな……。いや、短剣だ！

僕がさつき投げた短剣を、コイツはこつそり袖に忍ばせていたのだ。

「隊長さ……」

隊長にそのことを伝えようとしたが、時遅し。隊長が振り返った時、バイバルスは器用にもすでにその短剣で手首のロープを切ついた。そしてすぐさまその短剣を持つと、ルイーズに向かっていった。

「キヤアア！」

一瞬の隙を突かれた。強盗なんかがよくやるよに、バイバルスはルイーズの喉元に短剣を突き付け、彼女を人質に取つた。

「誰も動くな！ 動けば王の命はないぞ！」

「クツ……」

隊長含め、誰一人動くことができなかつた。

バイバルスはルイーズを連れたままバルコニーに出た。そしてバルコニーの手すりに上ると……そのまま飛び降りてしまった！

「なつ！？」

兵士たちが一斉にバルコニーに駆け寄る。僕も慌ててバルコニーに出た。

「ここは三階だ。ルイーズを抱えたまま、普通に着地するといつのは難しいだろ？」「！」

下を見下ろそうとしたちょうどその時、彼方から耳慣れた羽音が聞こえた。

「バイバーイン！」

都に来る途中に戦つたあのドラゴンと同じ外見をした魔物が、こちら目がけて飛んできた。そして素早くバイバルスとルイーズを背中に拾い上げると、再び彼方へと飛び去ってしまった。

そう、ルイーズは連れ去られてしまったのだ。

つづく

第十五話 救出作戦

ルイーズがさらわれた後、僕たちは広間へと戻った。僕は広間の隅にある椅子に腰かけながら、考えていた。

僕をこの世界に連れてきたのは、ルイーズであつた。そして、ルイーズは連れ去られてしまった。かつてルイーズの友人だつたという男、イスマイル・バイバルスによつて。

あの瞬間、僕は目の前で一国の王が誘拐されたということに気が動転していて、それについて深くは考えていなかつた。しかしこうして落ち着いてみて、初めて事態の深刻さがわかつた。

僕は、元の世界に帰れなくなつたのだ。

ルイーズがいない今、なぜ僕がこの世界に連れて来られたのか、その理由を知る術もなかつた。

そして、僕はこれからどうすればいいのだろう？
生きていかなければならないのか？ この見知らぬ世界で？ 魔物や凶暴なモンスターに満ち溢れた、この世界で？ 母さんとも一度と会えないまま……。

知らず涙が零れた。

突然すぎる。あまりに突然すぎるよ……。

「大丈夫か？」

もたげていた頭にコシン、とコップを当てられた。見上げると、そこにはリュクル、ゴス隊長が立つていて。彼は手に持つた飲み物を僕に差し出し、心配そうに僕の顔を覗き込んだ。

「陛下のこと、知らせてくれてありがとな。怖かっただろう」
そう言つて、隊長は僕の頭に軽く手を置いた。わっと泣き出しそうになるのを、僕は必死でこらえた。

ルイーズがさらわれた時、一番動搖していたのはリュクルゴス隊長だった。がつくりと膝をつき、自分自身の愚かさを罵つていた。それが今では冷静さを取り戻し、僕を気遣つてくれている。

「すみません……。あの短剣を投げたのは僕なんです」

そう。僕がルイーズがさらわれる原因を作ったのだ。あの時、短剣を拾つてさえいれば……。

「いいや、それはお前のせいじゃない。ちゃんとそういうことを確認しなかつた俺や、兵士たちの責任だ」

リュクルゴス隊長は気を取り直すように、笑つて言つた。

「そういえば自己紹介がまだだったな。もう知つているかもしれないが、俺はリュクルゴス・ヘイロウタイ。こう見えて討伐隊の隊長だ」

リュクルゴス隊長は、黒の長い髪を後ろで一つに束ね、額にはバンダナを巻いている。いかにも軍人らしく、がつしりとした体には、皮でできた鎧を装備していた。歳は三十前後といったところだろう。

「僕はエンノイア・グノーヴァーです」

よろしく、と言いかけた時、広間で歓声が上がつた。

見ると、広間で兵士たちが一様に整列していた。兵士たちの前には、中年の軍人が立ち、その男が『陛下を救出するぞ!』と一声叫ぶと、兵士たちが一斉に賛同の声を上げた。

僕は驚いてリュクルゴス隊長に尋ねた。

「助けに行くんですか!? 王様を!?」

「ああ、勿論だ。陛下は恐らく魔界に連れて行かれたのだと思うが、助けられる可能性がなくなつたわけではない。すでに執政官から救出の命令が出ているしな」

「そうか! その選択肢があつたんだ! 僕は、まだルイーズを救

えるかもしれない、ということを、すっかり失念していた。

「じゃあ、俺はそろそろ行かなきゃならん。エンノイア、大丈夫か？ 一人で帰れるか？」

「大丈夫です！ ありがとうございました、リュクルゴス隊長！」
僕が元気を取り戻したことに安堵したリュクルゴス隊長は、整列している兵士たちの前に歩み出た。

「諸君。我らはこれより国王代理、執政官閣下の命によりて、国王陛下救出の任に就く。敵は魔界に通ずる非道の魔術師、イスマイル・バイバルス。だが同志たちよ、恐れることはない。我らアイオリア軍が力を合わせれば、恐れるものなど何もない。各自、心してかかるがよい……！」

そう言つと、リュクルゴス隊長は自らの剣を掲げた。兵士たちも同様に剣を掲げ、じき闘の声をあげた。

広間の窓から差し込む光を受けて、無数に掲げられた兵士たちの剣が、きらきらと輝いていた。

第十六話 アイオロス

「デューク」

椅子から立ち上がった僕の側に、デュークがおずおずと近づいてきた。

僕はデュークの目を見て、静かに言った。

「いや……アイオロスと呼ぶべきかな？」

『アイオロス』と呼ばれて、デュークはたじろいだ。

もう、僕には分かっていた。こいつはただの鳥じゃない。

こいつの名前はアイオロス。ルイーズのペットだか何だか知らないけど、こいつが僕をこの世界に連れてきた張本人（鳥？）だ。

こいつはルイーズに頼まれて、僕をこの世界へと導き、時には手助けし、時には僕の力を試しながら、僕をルイーズと引き会わせた。今まで聞こえていた声は、こいつの声だったんだ。でもそれは、心に語りかけるような感じで、直接話せるわけじゃない。こちらから声を聞こうとするのも無理だ。

「そうだろ？」

そう聞いても、デュークはいかにも鳥らしく、小首を傾げただけだった。

この世界に連れてきてしまった責任を感じてか、それとも正体がばれたせいか、今のデュークはどこか僕におびえているようだ。

元の世界に帰れなくなつて、悲しいし、悔しい。さっきまでの僕なら、デュークを罵つて、ひつつかんで、投げ飛ばしていただろう。でも、ルイーズが助けられるかもしれないとわかつて、僕の心は少し変わっていた。

僕はデュークに言った。

「一緒に^{ヒトシヨリ}テユーク。もつ怒つたりしないからわ」

ピイツ！

デユークは嬉しそうに一声鳴き、僕の肩にとまつた。

「で……これからも^{ヒテ}デユークつて呼んでいい？」

デユークは頷くように、うんうんと首を振った。

ふふ。可愛いやつ。

そうして、僕は^{ヒテ}デユークと共に王宮を後にした。

リュクルゴス隊長率いるアイオリアの兵士たちは今しがたルイーズの救出に向かつた。

え？ 僕はどうするかつて？

勿論黙つてルイーズが救出されるのを待つわけじゃないよ。

街の外に出ると、そこにはまだリュクルゴス隊長たちがいた。長旅になるのだろう、たくさんの荷馬車も用意してある。

僕は気付かれないように、そつとその一つに乗り込んだ。

「よーし！！ しゅつぱーつ！！」

掛け声とともに、馬車が走りだした。

ハアアアア。今日は本当にいろいろなことがあった。

草の上を走る車輪の振動を感じながら、僕は荷馬車に積まれた木箱にもたれて、心地よい眠りに落ちていった。

כ,ב,ה

第十六話 アイオロス（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
次話から第三章に入る予定です。

第十七話 一人の隊長

ガタゴトガタゴト……。ガタンッ！

「！？」

突然の衝撃に驚いて、僕は目を覚ました。馬車が止まったようだ。外から、声が聞こえてきた。

「よーし！ 今日はここで夜営だ！」

僕は今、荷馬車の幌の中にいる。ルイーズの救出についていくため、こつそり乗り込んだのだ。もちろん肩の上にはデューコ。

「ピー！」

「しつ。静かに。見つかっちゃうよ」
グウウウウ。

おつと……デューコには静かにしろと言いながら、僕のお腹は静かではなかつた。

「お腹空いたなあ……」

兵たちの晩御飯を用意しているのだろう。どこからか良い香りが漂ってきた。

僕はふと、寄りかかっていた木箱を見た。元からこの馬車に積まれていたものだ。

食べ物でも入っていないかな……。

そう思つて木箱の蓋を開けると、残念ながら中に入つていたのは食べ物ではなかつた。しかしその中身は、僕にとつて空腹を忘れるほど魅力的な物であつた。

「剣だ……」

木箱の中には、たくさんの剣が詰められていた。

僕はその一つを手に取つてみた。

長さんは一メートル弱。「こく一般的な兵が持つような、實に質素なものだが、それでも僕は大興奮。シーアには短剣を貰つたけど、こんなちゃんとした剣を握るのは初めてだ。

僕はすっかりその剣に見とれていた。だから、馬車の幌をめくる人の気配に全く気がつかなかつた。

「おい子供！ そこで何をしているー！」

「だから違つて言つてるだろーー！」

勝手に荷馬車に乗り込んでいたのを見つかってしまった僕。なんと、剣を握っているところを見られてしまつたせいで、あらぬ誤解を受けてしまつた。

「いいか、もう一度だけ聞くぞ。なぜ我が軍の武器を盗もうとした！？」

盗むだなんてとんでもない！ ただ食べ物を探していたら、箱の中に剣が入つていたから手に取つてみただけなのに。

王宮にいた兵士たちと同じように、モヒカン頭のヘルメットをかぶつた男が一人。さつきから僕が剣を盗もうとしたと決めつけて、全く聞く耳を持たない。

「何事だ？」

男たちの後ろから、上官らしき人物が声をかけた。顔はよく見えない。

「はっ。この少年が荷馬車に積んであつた武器を盗もうとしておりまして……」

「だから違つてばー！」

「どれどれ？」

その上官らしき人物がひょいと顔を覗かせた。

あ、あ、あ！ リュクルゴス隊長だ！

向こうもこっちに気づいたらしい。田を丸にして驚いている。一度顔を会わせているため、なんとも気まずい雰囲気になってしまった。

しかし、驚くべきはここからだつた。リュクルゴス隊長はオホン、と咳払いをすると、

「あ～……すまん。こいつは俺が雇つたんだ。剣の数を確認してもらつてたんだ」

兵士たちにそう言った。

「そ、そうでありますか。し、しかしこんな子供をお雇いになられたので？」

「子供にだつて雑用くらいできるだろ。なあ？」

そう言つてリュクルゴス隊長は僕に田配せした。

「は、はい」

僕はうなずいた。

と、とりあえず助けてくれた……のかな？

「何事ですかな」

すると、もう一人、上官らしき男が現れた。
さつき広間で兵士たちの前に立つていた中年の男だ。おそらくリュクルゴス隊長よりは少し年上、髪には少し白髪が混じつていて、ぐるりとカールしたひげを生やしている。

その男は、リュクルゴス隊長を見るなり、大げさに驚いてみせ、すっとんきょううな声をあげた。

「おお！ これはこれは、リュクルゴス隊長ではありませんか。う

ちの兵たちに何か御用ですか？」

リュクルゴス隊長は、男に冷たい視線を投げかけた。

「別に。お宅の兵が私の雇つた少年をいじめていたので、助けてい

たところですよ。では

「どことなく棘のある言い方だ。中年の男は、僕を連れて立ち去ろうとするリュクルゴス隊長に、すかさず声をかけた。

「おお、そういうればリュクルゴス隊長！ 話によれば、陛下が敵に捕らえられた時、陛下は名指しであなたに助けを求めたそうですね。広間にいた者があなたの名を叫ぶ少年を見たと言つていましたよ」リュクルゴス隊長の動きが止まつた。ゆつくりと男の方に向き直る。

「……それがどうかしましたか？」

男はフハハ、と笑うと、嫌味たらしく自分のひげを撫でた。

「不思議ですなあ。王宮警備を担当している『衛兵隊』の隊長である私でなく、わざわざ『討伐隊』隊長であるあなたを呼ぶとは……」やや間があつて。

「何か”特別な理由”でもあつたんでしょうか

男は『特別な理由』という部分を妙に強調して言つた。

リュクルゴス隊長は一瞬沈黙したが、やがて肩をすくめて言つた。
「それは……あなたが頼りにならないからじゃないですか？ 僕に皮肉を言つたために、わざわざ仕事をほっぽり出してくるような男は、そりや信用ならんでしょう」

男の顔がみるみる真っ赤になつてきた。

リュクルゴス隊長は高らかに笑つて、今度こそ僕を連れてその場を離れた。振り返つて見ると、男は口汚く罵りながら、兵たちにあたり散らしていた。

な、何なんだ一体……。なんだか知らないけど、険悪な雰囲気。

それに、僕はこれからどうなつちゃうんだろう。

ニ
ギ
ヘ

第十八話 道中 part 1 (前書き)

11 / 23 自作挿絵追加しました。元々小説とは関係のないイラストだったので、服装の変化等はあまり気にしないでください（笑）

> . + 3 5 5 9 9 — 3 7 8 1 <

「どうだー？ うまいかあ？」

ペツトに餌でもやつていろいろな言い方だ。確かに今の僕は、まるで動物のようご飯に食りついていた。

馬車に乗っていたのを見つかってしまった僕。拳句、軍の剣を盗もうとしたと勘違いされてしまった。そこで助け船を出してくれたのがリュクルゴス隊長だ。しかも、お腹を空かせた僕を見かねて、食事まで出してくれた。

それで、ヒリュクルゴス隊長が話を切り出した。

「なんで剣なんか盗もうとしたんだ？」

「ごほつごほ。

「だ、か、ら！ 盗もうとしたんじゃないんです！ 食べ物を探してたら剣があつたから、手に取つてみただけなんです！」

リュクルゴス隊長はやれやれ、といった感じで、首を振つた。

「じゃ、質問を変えるが、なぜ勝手に馬車に乗り込んだんだ？」

僕は答えた。

「僕も王様を助けたいからです」

「なぜ？」

「王様にもう一度会いたいんです」

「なぜ？」

「王様に聞きたいか」

「何を？」

「それは……言えません！」

矢継ぎ早に繰り出される質問に、思わずべらべらと喋つてしまつ

といひだつた。

自分は異世界の人間で、この国新しい王だから、ルイーズによつてこの世界に連れて来られた。僕はルイーズに「新しい王」の意味と、元の世界への帰り方を聞きたい。

そんな話誰が信じるものか。自分だつて信じられないのに。

頭のおかしい子だと思われて、警察（があるのかどうか知らないが）に突き出されたりしたら面倒だ。ここは、話さない方が得策だろう。

リュクルゴス隊長は軽く溜め息をついて、言った。

「まったく……仕方ないな。連れて行つてやるよ」

「ほんと！？」

「お前の意志が固いのはよくわかつたよ。ただし、仕事はちゃんとじろよ。そういう名前で助けたんだからな」

堂々といつていいといつことになると、現金なもので、がぜん楽しくなってきた。僕は鼻歌を歌いながら、みんなの食事の準備をしたり、テントを張るのを手伝つたりした。

初めは僕を奇異な目で見ていた兵士たちも、次第に話しかけてくれるようになった。そして、いろいろなことを教えてくれた。

アイオリア軍には二つの部隊があり、それを、「衛兵隊」「討伐隊」という。

「衛兵隊」は主に王宮・都の警備を担当している。特徴はモヒカン頭のヘルメットに、サンダル。古代の王国・テラステイアの服装なんだそうだ。そしてその隊長が、先ほどの中年男というわけだ。ヴァシリス隊長といつらしき。

もう一方の「討伐隊」は、地方都市の警備と、文字通り魔物の「討伐」を職務としている。近頃はあるワイバーン以外にも、さまざまな魔物が現れては、町々を襲っているそうだ。魔物の襲撃の情報が入れば、近くの都市に駐屯している討伐隊が、それを退治しに行くというわけだ。

（僕はあの、ワイバーンに襲われた村のことを話した。しかし、残念ながら今のところ、小さな村などには手が回らないらしい）

それから、討伐隊の服装は特には決まっていない。マントを羽織つている人が多いかな。

隊長はリュクルゴス・ヘイロウタイ。今さつき僕に食事を出してくれた、あの人大だね。変わった苗字ですね、というと、なぜか兵士たちに意味深に笑われてしまった。

しかしながら、戦争や大きな任務の時は、どちらの隊も駆り出されるそうだ。だから、今ここには衛兵隊と討伐隊の両方がいる。他にもいろいろ聞いたけど、僕に覚えられたのはこれくらい。

そういうしているうちに、三日が経った。

つづく

僕がリュクルゴス隊長・ヴァシリス隊長率いるルイーズ救出隊に加わってから、三日が経った日のこと。僕はいつも通り、テントを張る手伝いをしていた。

「ピピ！」

「どうしたのデューク？」

デュークが何かに気がついたように、身を震わせた。

「あっ！」

僕の肩に乗っていたデュークが茂みの中に飛んでいってしまった。『こういう時つてだいたい良くないことが起こるんだよな……。すでに嫌な予感がしていたが、僕は仕方なくデュークを追いかけることにした。

いたいた。

茂みを掻き分けると、思ったより早くデュークを見つけることができた。

しかして僕の予感は当たった。茂みの五十メートルほど先に、山のようになんもりと大きな「何か」がいたのだ。いや実際にはもう少し離れているかもしぬないが、とにかくとてもなく大きいので、距離感がよくわからない。

その大きな山は、猛烈な勢いでこちらに迫ってくる。

僕は急いでそこらにいる兵士たちに知らせた。すぐさま戦いの準備を始める兵士たち。

ほどなくして、ソイツは僕たちの前に姿を現した。

ひと目でわかつた。

牛だ。

とはいえる、自然の牛ではあり得ない大きさであった。闘牛の牛だつて、コイツに比べたら可愛いもんだ。普通の牛の一、三倍の大き

さがあり、それにふさわしい巨大な角まで生えていた。

近くにいた兵士が叫んだ。

「タウロスだ！」

「タウロスって！？」

「牛のモンスターだよ！」

モンスターとは、自然の動植物が月の光を浴びて変化したもの。シーアによれば、モンスターは魔物と違つて、自分の縄張りが侵された時だけ襲つてくるらしい。

この一帯は、コイツの縄張りだつたらしい。この牛のモンスターは、頭から湯気が出そうなほど怒り狂つっていた。

しかしそこは歴戦の戦士たち。こんなモンスターごときにはひるみもせず、猛然と立ち向かつていった。

我々のキャンプに到達することもなく、あつという間に兵士たちに取り囲まれる牛。

いやはや、当たり前だけど、僕の出番はなさそうだな。すっかり安心して、僕は一足先に料理の支度を始めたこととした。

ところで、この世界には当然、マッチやライターなんでものはない。火を着けるのは、いわゆる「火打ち石」みたいなやつだ。石を金属に打ち付け火花を起こし、それを上手く纖維質の火口に点火する。後はフリー。

こんなの歴史の教科書でしか見たことないし、初めは着けられるわけがないと思ったが、実はこれが意外に着けやすい。この国が、乾燥した気候なせいもあるかもね。

三日間練習したお陰で、僕はすっかり火打ち石のプロになつていた。

帰つたら皆に見せて自慢しよう。記念にひとつ持つて帰つてもいいかな……。

くだらないことを考えながら、僕はいつも通りに火を着けた。

「わっ、バカ！」

誰かがひどく慌てた声で、そう叫んだ気がした。

つづく

僕が鍋を温めようと火を着けると、突然あたりが騒がしくなった。なんと、火を見たタウロス（牛のモンスター）が興奮し、暴れだしたのだ。

一気に形成逆転。

タウロスに張り付いていた兵士たちが次々と振り落とされた。前足を激しく踏み鳴らし、まったく手がつけられない。あわや踏み潰されそうになる兵士たち。

僕は慌てて火を消した。しかし、それが一層まずかった。何を思ったか、タウロスがいきなりこっちに向かって走り出したのだ。キャンプのテントを踏み潰しながら、一からへ迫つてくる。蹄の音が、地鳴りのように響いてきた。

しかし、僕は迫りくるソイツを呆然と見つめながら、一步も動くことができなかつた。

ガキイイイイイイー！

「ほら、何をほりつとしてるー。さつさと逃げろーー。」

「は、はー！」

気がつくと、リュクルゴス隊長が、タウロスを剣で抑えていた。他の兵士たちも体勢を立て直し、一斉に飛びかかる。

結局、タウロスはキャンプの周囲をさんざん走りまわった拳銃、どこかへ走り去つていつた。

もうキャンプはめちゃくちゃ。テントは踏みつぶされるし、馬車は壊れるし。

モンスターが去つたはいいが、僕たちはその後、後片付けに追わ

れることとなつた。

「まったく、もう少しで倒せるところだつたのに……」

「怪我しちまつたよ……」

「隊長はなぜあんな何もわからない子供を連れてきたんだろう。あちこちで愚痴が聞こえてくる。みんな直接は言わないが、相当、僕や、僕を雇つた（ということになつてこる）リュクルゴス隊長に頭にきているようだ。」

あ～あ……。

僕の馬鹿。グズ。役立たず。

せっかく優しくしてくれたのに、リュクルゴス隊長にまで迷惑かけて。役立たず役立たず……。

「どうしたエンノイア。暗いな

僕が一人、破れたテントを繕つていると、リュクルゴス隊長が声をかけてきた。

「あまり構つてやれなくてすまん。ちょっといろいろとおしゃべりしてくな

「隊長さんが謝ることなんてありません！」

だいたい忙しいのは僕のせいだし……。

僕が落ち込んでいるのを察してか、リュクルゴス隊長は励ますよ

うに僕の肩をぽんぽんと叩いた。

「みんなの言うことなら気にすんな。失敗は誰にでもあることや。次から気をつければいい」

思いがけず優しい言葉をかけられて、涙が出そうになつた。

「あの……僕はどう言われてもいいんです。ほんとに迷惑かけたから。でも、僕のせいで隊長さんまで悪く言われてるみたいで……」

リュクルゴス隊長は笑つた。

「なんだ、そんなこと気にしてたのか

「だつて……」

「それはお前のせいじゃない。俺はもともと嫌われ者なんだ」「そんなこと！」

そんなことあるわけない！ こんな優しい人が嫌われ者だなんて。そう伝えて、リュクルゴス隊長は意味深に、ちょっと寂しそうに笑つただけだった。

つづく

「ときにエンノイア。お前、剣は使えるか?」

落ち込んでいる僕を見かねて、励ましてくれたリュクルゴス隊長が、ふいにそんなことを言った。

一 二 三 使えません

リュクルゴス隊長は軽く、そうか、とだけ返した。
ほんとに僕って役立たずだ……。せっかく励ましてもらひたのに、

すると、リュクルゴス隊長は、思いがけないことを言った。

「ほんとに!?」

それは願つてもないことだ。ルイーズがあのローブの男・バイバ
ルスに捕らわれてしまつたとき、助けに来たのがこのリュクルゴス
隊長だつたわけだが、そのときの剣さばきがかつこよかつたのなん
のつて！ そんな彼に、剣を教えてもらえるだなんて！

「もちろんお願ひします！」

やつぱり、「嫌われていい」だなんて、僕を励ますための嘘だつたんだな。こんなに親切な人が、嫌われ者なわけないもん。

かくして、僕はそれから数日間、剣の特訓を受けることとなつた。

「ほりほり、踏み込みが甘いぞー。」

ほつ。ほつ。

今、リュクルゴス隊長に剣の特訓を受けている真っ最中。隊長の

提案を受けて、僕は仕事の合間に、剣を教えてもらえたことになつたのだ。

それにしても、信じられないな。向こうの世界じゃ、（当たり前だけ）剣なんて見たことも触ったこともなかつたわけで。それなのに僕は今こうして、軍隊に混じつて、剣をふるつている。僕が通つている学校の誰一人、こんな経験をしたことはないだろう。

「なかなかスジがいいな。もう少し筋肉をつけた方がいいかな？」汗をぬぐいながら、隊長は笑つて言つた。

そう。自分で言つのもなんだけど、僕つて結構剣が上手いと思うんだ。元々運動神経いい方だしね。

ただ、隊長が言う通り、力はあんまり強くないかも。

隊長は剣をしまつと、近くにいた若い男を呼び寄せた。

例のモヒカン頭のヘルメットじゃないから、討伐隊の人だな。隊長はその男を指して言つた。

「エンノイア、紹介しよう。討伐隊副隊長、ゾアだ。わからないことはこいつに聞くといい

まだ二十代前半くらいだろ？、あどけなさの残る顔をした彼は、この国では珍しく短髪。いかにも若者らしく、日に焼けて、活き活きとしている。

「じゃ、俺はここのへんで。また後でな」

そう言つて、リュクルゴス隊長は仕事に戻つていった。

あとに残された副隊長ことゾアが、よろしく、と手を差し出してくれた。彼と握手をした後、さつそく僕は気になつていてみることにした。あまり立ち入つたことを聞いてはいけないと想い、リュクルゴス隊長には直接聞けなかつたことだ。

「すつごく失礼なことかもしれないんですけど

「なんだい。何でも言つてごらん

「リュクルゴス隊長とヴァシリス隊長って、仲が悪いんですか？」

あまりに不躾な質問に、ゾアは少々面食らったようだつたが、苦笑いをして、答えてくれた。

「ああ……。残念ながら、事実だね」

「どうして仲が悪いんですか？」

「それにはちょっと込み入った事情があるんだ。アイオリア軍には、『討伐隊』と『衛兵隊』があるのは知っているよね？」

僕はうなずいた。

「それぞれの隊を束ねるのが、リュクルゴス隊長とヴァシリス隊長なわけだが、さらにその二つの隊を統括する、『將軍』という役職が存在する。現在アレキサンダー様がその職に就いていらっしゃるが、その方が引退なされば、当然次の將軍はどちらかの隊の隊長ということになる」

ここまで聞いて、僕はだいたいの予想がついた。だから、次の將軍をめぐつて、仲が悪いというのだろう。

「そう。まあ、実のところを言つと、ヴァシリス隊長の方が、一方的にリュクルゴス隊長を目の敵にしているんだが……おっと、これは聞かなかつたことにしてくれ」

「それで、結局のところどつちが優勢なんですか？」

「それはまだ何とも言えないな。ヴァシリス隊長の御家は代々、軍の要職を勤めてきた家系で、実力・家柄ともに申し分ない。だが痼疾持ちだし、差別主義だし……人望があるとは言い難いな。対するリュクルゴス隊長は、特に討伐隊からの支持が大きく、王からの信頼も厚い。……厚すぎるというべきかな」

僕が首を傾げると、ゾアは声をひそめて、言葉を選びながら言った。

「ほら……わかるだろ。陛下は隊長に対して、つまりその……特別に好意を寄せているから、ヘタに昇格させたりすると、よからぬ噂を立てられかねないんだ。陛下が隊長をひいきしている、とかね。実際には、陛下は感情で決めたりなさる方じゃないんだが……。だ

から、誰もが納得できるような大きな手柄がなければ、リュクルゴス隊長が將軍になるのは難しいんだ」「ふうん。わかったような、わからないような。

「それともうひとつ……

「おおい、ゾア。ちょっと来てくれ！」

ゾアが言葉を続けようとしたとき、リュクルゴス隊長がゾアを呼んだ。

「おつと。おしゃべりが過ぎたようだな。じゃあ、また」

そう言って、ゾアは行ってしまった。

しかし、僕はその続きが気になって仕方がなかつた。そこで、僕はその夜、ゾアのテントに行って、続きを話してもらうことにした。

もつとリュクルゴス隊長のことが知りたくなつた僕は、その夜ゾアのテントへと向かつた。副隊長といえど六人で一つのテントを使つているため、ゾアは、テント内の他の人たちがいなくなつてから、話を切り出した。

「……これは俺から聞いたって言わないで欲しいんだけど」話を促すように、僕は何度も頷いた。

「リュクルゴス隊長が將軍になるのを難しくしている一番の理由は、彼が異民族だということなんだ」

「異民族？」

あまり耳慣れない言葉に、僕は思わず聞き返した。

「そう。彼はアイオリア人ではない。このアイオリア島の西に住む、ウタイ族という部族の出身なんだ」

僕ははつとした。

そういえば、リュクルゴス隊長の名前はリュクルゴス・ヘイロウタイ。

ヘイロウタイ。

僕が変わった名字だといふと、周りの兵士たちに笑われたのを思い出した。それから……リュクルゴス隊長の言葉を思い出した。隊長は、自分のことを「嫌われ者だ」と……。

「うん。皆が皆ではないが……ウタイを嫌つたり、バカにしたりする者がいるのは確かだね。それに、十年ほど前までウタイ族とこの国は戦っていたんだ。そのせいで、ウタイを恨んでいる者もいる」

僕は悲しくなつた。あんなに親切で明るい良い人なのに、出身や

立場の違いで、嫌われたり、笑われたりするなんて。

そんな僕を見て、ゾアは付け加えた。

「とはいって、彼が傑物であるのは確かさ。そんな不利な立場にありながら、若くして討伐隊長となり、今では多くの兵たちに支持されている。そのことがそれを証明しているよ。俺も隊長のことを尊敬している」

リュクルゴス隊長について話すゾアの口調は、本当に誇らしげだった。

つづく

学問と宗教の中心地ヒエラポリス。街の中心には、かつてルイーズやバイバルスが在籍していたという大学がある。大学といつても、向こうの世界でいうそれとは幾分異なる。この国でいう大学とは、政治家や士官など、将来国の仕事に携わる人々が、学問・政治・宗教・武術などを総合的に学ぶ場所である。ルイーズ以前の王は、この大学を出していることを、登用の絶対条件としたといふ。学長を勤めるのは、アイオリアで最高位の司祭。

以上、ゾアの受け売り。

僕たちは首都アエロポリスを出発してから、約一週間かけて、このヒエラポリスへとやって来た。目的はその学長兼司祭様に、魔界への行き方を聞くため。

こんなに仰々しく出発して来たのに、まだ魔界への行き方もわかつてなかつたなんて……。なんだか拍子抜け。リュクルゴス隊長によれば、魔界に行くのは、それくらい大変なことらしい。

全員で街に入ることはできないので、リュクルゴス隊長とゾア、数人の兵が司祭に会いに行くこととなつた。

僕はというと、なんと司祭様が僕に会いたがつてゐるそうで、一緒に街へ入ることとなつた。

街の中に入ると、大小さまざまの神殿が立ち並んでいた。ここは、大学の街でもありながら、宗教の街もある。歩いているのは神官と、将来を約束された学生たち。陽気な市場の声が響く都と比べると、なんとも厳めしい雰囲気が漂つていた。

リュクルゴス隊長に連れられ、ひとりわ大きな神殿に入る。控えていたロープの神官に用件を伝えると、いそいそと奥の部屋に入つていつた。

控えの間の壁には、神様と思われる絵がたくさん描かれてあつた。神官を待つ間、なんとなくその絵を眺めていると、ふと、その中の一つに目が止まつた。

それは、一羽の鳥の絵であつた。幾重にも分かれた尾は地に届くほど長く、広げた羽はドラゴンの翼のように、この上もなく優美であつた。頭の上にピンと立つた羽が、何かを思い起させた。

そのとき、ゾアが話しかけてきた。

「アイオロスに興味があるのかい？」

「え……アイオロス？」

「アイオロスはこの国の守護神さ。鳥の姿をした風の神なんだ」

僕は自分の肩の上に乗つた、デューケ 「アイオロス」を見た。

お前つてそんなすごいものだったの！？

しかしゾアは、デューケに全く気を留めていない。デューケがアイオロスだということを、まるで知らないようだ。

「その声を聞くことができるのは王だけ。しかし王でさえその眞の姿を知ることはできない。アイオロスは普段、仮の姿をしているからね」

僕はどうきりとした。またも「王」という言葉。

僕はデューケ

アイオロスの言葉を聞くことができる。だ

から「新しい王」つて……？

「どうぞ。奥で大司祭様がお待ちです」
しばらくして神官が戻ってきた。

ヒエラポリスの司祭に、魔界への行き方を聞きに来た僕たち。司祭にも魔界への行き方はわからないそうだが、大学の豊富な情報を使って、直ちに調べてもらえることとなつた。

それから、大学の学長でもある司祭に、在学中のバイバルスの様子についても聞くことができた。

「……バイバルスは非常に優秀な学生でした。いつも陛下と首位を争っていましたよ」

司祭はそこで顔を曇らせた。

「テラステイアに、大変な憧れを持っていたようです。今考えれば、強大な力を手に入れたがっていたのかもしれません」

その時、外で騒ぎが起つた。先ほど僕たちを案内した神官が、慌てて部屋に駆け込んできた。

「何事だ？」

「魔物の襲撃です！ 街に魔物が一匹現れました！」

一同は色めきたつた。司祭はリュクルゴス隊長を見て言った。

「貴方は討伐隊長でしたね。魔物を退治していただけないでしょ
か」

「ええ、もちろんです。しかし……」

リュクルゴス隊長は司祭をひとり残してよいものか、悩んでいる
ようだ。

「私なら大丈夫です。神官もおりますし。どうぞ皆さんで行つてく
ださい」

リュクルゴス隊長はしばし考え、部下を引き連れ外へと向かつた。
僕も一緒に戦いたかつたので、それに続いた。

な、なんだこりや／＼＼＼＼。

外に出ると、確かに魔物らしき生物が、猛威を奮っていた。しかし、その外見はなんとも奇妙。

顔は人間の女のようだが、体は異様に細長く、ウロコがついていて、まるで蛇。しかもその蛇のような胴体からは、六本の人間の腕が生えていて、それぞれが曲がった剣を持っていた。体長は三メートルほど。

そんなやつが、二匹もいる。

「ほらほら、しつかりしろ。稽古の成果見せてくれよ！」
僕が圧倒されていると、リュクルゴス隊長がそう言った。
そ、そうだ！ 今度こそイイとこ見せなくっちゃ。震える手で貰つた剣を握りしめ、僕はどうにか皆について行つた。

つづく

第一十五話 情けない戦い

人間の女のような頭に、蛇の胴体。その胴体から多種多様な方向に突き出た、六本の腕。

異様な姿をした一匹の魔物は、それぞれの手に持った六本の剣を振り回し、まさに蛇のように体をくねらせながら、聖地と呼ぶにふさわしいこの莊厳な街並みの中を、舐めるように這いずり回っていた。

蠢く胴体が民家や神殿の外壁にぶつかるたび、鈍い衝撃音と共に柱が崩れ、建物の中からは悲痛な叫びが聞こえるのであった。

巣を追われたアリのように、点々と建物を飛び出してくる人間たちに、魔物は容赦なく剣を振るう。

しかし団体の大きな生物というのは、得てして俊敏とは言い難いものだ。振り下ろされた剣の先が虚しく空を切ると、整然と敷き詰められた石畳の地面を割き、その先の土にまで深く突き刺さった。魔物はいかにも腹立たしげに、強引に剣を引き抜くと、次なる獲物を求めて這い回るのであった。

とはいえる間たちもただ恐れおののき逃げ回っているわけではない。

ここはヒエラポリス。街の中心にそびえる大学には、将来士官になることを志す、武術の心得のある者が多数在籍している。我々討伐隊が到着する以前から、我こそはと思う者たちが、魔物に飛びかかり、剣を突き立て、魔法を浴びせ、それなりのダメージを与えていた。

そんな状況下で駆けつけた僕たち。街の外で待機していた討伐隊の仲間や、衛兵隊も合流し始めた。芥子粒のようにちっぽけな人間

といえども、これだけ集まればいかなる巨大な魔物でも太刀打ちできないであろう。

僕は人の波に揉まれないよう注意しながら、勇気を振り絞り、素早くかつ慎重に標的に接近した。雑踏を搔き分けながら進むと、目の前に魔物の尻尾らしき部分が見えてきた。ウロコの一枚一枚が確認できるほどの距離だ。そのウロコは、ヌメツとしていて、妙な光沢を放っている。

僕は剣の柄に手をかけ、そのまま勢いよく剣を抜いた。シアアに貰つた短剣とは、長さも重さも段違い。自らの体格に対し大きすぎる剣に戸惑いつつ、全ての刀身を抜き放つと、シャン、と金属のこする音がした。

「ああ、いよいよ剣を使う時が来たんだ。

周囲のざわめきが、背景の一コマのように静かになった。まるでこの世界に、僕と魔物しか存在しないみたいだ。汗ばむ手で滑りそりになりながら、思い切り剣を振り上げる。

そうして、剣を振り下ろそうとしたその瞬間。

視界がぐるりと回転したかと思うと、みるみる世界が横倒しになつていつた。静まり返っていた（ようにはじた）雑踏の音が、突然に音量を増した。

目の前を目まぐるしく通り過ぎるのは、人の足？

「大丈夫か！？」

隣で魔物と格闘していた一人の兵士に、腕をグイと引き上げられた。しばらくわけがわからずに、呆然としていた僕だったが、ようやく理解した。

どうやら僕がチンタラ剣を構えている間に、魔物が自らの尾を振り回し、僕はそれに弾き飛ばされたらしい。そういうれば倒れる前、一瞬目の前を巨大なウロコのついた胴体が横切ったような。いつの

間にやら魔物が体の向きを変えている。

怪我をしたかもしない！ 慌ててシャツをまくると、脇腹に大きなアザができていた。さっきまで痛みなんか感じていなかつたくせに、アザに気付いた途端、脇腹がひりひりと痛みだした。

僕を助け起こした兵士はこっちを振り向きもせずに、苛立たしげに言った。

「もういいから。下がつてろ！」

そ、そんな。ここまできて、そりやないよ。

戦う意志を見せようと、懲りずに剣を構えようとしたら、手の中に剣がなかつた。もちろん腰に差さつているわけでもない。弾き飛ばされた拍子に剣はどこかへフツ飛んでしまつたようだ。この雑踏の中で見つけられるとも思えなかつたので、僕は大人しく引き下がるしかなかつた。

あーあ……まーたいいとこなしだな。一朝一夕に剣の達人にはなれないみたいだ。

司祭のいる神殿に戻つてろと言わされたので、僕は雑踏を搔き分けつつ、元来た道をのろのろと引き返すのであつた。

第一十六話 不穏な気配

僕は雑踏を搔き分けつつ、司祭のいる神殿に向かつて、元来た道を引き返していった。

周囲の建物の破損具合が、魔物の力の凄まじさを物語つている。柱がなぎ倒され、屋根の落ちた神殿。壁が破壊され、居間がむき出しになってしまった民家。

建物の中にいた人々はどこへ行つたのだろう。上手く逃げ延びたのかもしないし、打ち砕かれた壁や柱の餌食になつたのかもしかなかつた。

死体を見ることはなかつたが、魔物と格闘する兵士に紛れて、怪我人を担架で運ぶ兵士の姿があつた。

大きな街は幸いだ。あのワイバーンに襲われた村は、このような手厚い保護を受けることができなかつたのだから。

目の前に広がる悲惨な光景と、人々の異様な熱氣に眩暈がした。早く神殿に戻りたかった。脇腹が痛むせいかもしれない。さつきまでの意気込みが嘘のように、僕の気は縮んでしまつたのだ。魔物は街の入り口から大通りに沿つて、街の中心部あたりにまで達していた。大通り付近の建物は無残に破壊されていたが、幸い司祭のいる神殿は街の中でも最深部の、小高い丘の上に位置している。空を飛ぶ魔物でなければ、あの雑踏を飛び越えて襲うということはないだろう。

やや丘を登つたところで、下の街から歓声が響いた。

この丘から魔物のいる地点までは五百メートルほど離れているが、この街の建物は高くてせいぜい三階建て、しかも魔物の襲撃によ

り一部は破壊されていたので、建物が視界を遮ることはない。さらに高低差のせいもあり、街の中心部をよく見渡すことができた。

見れば、ちょうど魔物の一体が倒されたところであった。

蛇のような胴体をした魔物は、その長い体を石畳の地面にぐつぐつ横たわらせていた。体をU字状にくねらせながら、しばらく痙攣していたかと思うと、次第にその動きは弱まつていった。

そうしてぴくりとも動かなくなつた時、横たわつた魔物の胴体に、一人の人間が勝ち誇つたようによじ上つた。それを皮切りに次々と人々が上り始め、人々に雄叫びを上げる。

その叫びは、丘の上にまで響いてきた。人間の勝利にホッとする反面、自分があの場にいないことが少し悔やまれる。とはいえ、今さら戻ろうという気にはなれなかつた。

残るはもう一体。もう一体の魔物は倒された魔物と全く同じようなく外見をしていたが、この丘からはより離れた、つまり街の入り口側の方にいた。しかしその一体もすでに六本の腕が切り落とされ、倒されるのは時間の問題と思われた。安心して、僕は司祭のいる神殿を目指す。

魔物に弾き飛ばされた拍子に打つた脇腹が、まだヒリヒリと痛む。傾斜のある道を歩く時はなおさらだつた。どうせ誰も見ていないのだし、僕は脇腹をかばいながら、ヒヨコヒヨコと妙な歩き方で坂を登つていった。

しばらく行くと、神殿の三角屋根が見えてきた。白大理石できた柱の一本一本が、春の日差しを受けて輝いている。ここだけ見れば、まさに平和そのものだつた。

重厚な装飾のついた扉を開け神殿に入ると、中は妙にひつそりとしていた。人の気配はおろか、話声ひとつしない。いや、神殿なので静かなのは当たり前なのだが、神官の一人も見当たらないというのは、どうにもおかしい。

控えの間に行くと、ようやく神官らしき男を見つけることができ

た。フードを目深に被っているので顔は見えないが、ローブに描かれた特殊な文様を見るに、先ほど僕らを案内した神官だろう。入ってきた僕を見て、彼は飛び上がらんばかりに驚いたようだ。そして彼はすぐさま奥の部屋へと消えていった。奥は司祭のいる部屋だ。

その時、僕はひどく違和感を覚えた。

僕が入ってきただけでそんなに驚くのがそもそもおかしいし、彼の歩き方はどこか変だつたのだ。僕がさつきやつていたように、腹部を押さえながら、妙な足取りで歩いていった。そう、まるで、腹に怪我でもしているかのように。始め僕たちを司祭の部屋へ案内した時、神官はそのような歩き方をしていただろうか？

目深に被つたフードに、腹部の怪我……。僕は嫌な予感がした。

第一一十七話 失われた希望

どうか思い過ごしであつてほしい。

そう願いつつ、僕は疑惑の神官が消えた方向へと急いだ。

もしあのローブの男がバイバルスだとしたら、一刻の猶予もない。僕はノックをする間もなく、神殿の中でも一際立派な扉を乱暴に開け、中に飛び込んだ。

一瞬、中には誰もいないのかと思った。

確かに、僕の目の高さに人はいなかつた。円形の石造りの部屋には、壁に沿つてところ狭しと本棚が並べられている。部屋の中央には、分厚い本が乱雑に積まれた豪華な机が置かれていた。縁には金があしらわれ、眩しいほどに光つている。優美な曲線を描いた机の脚。そのラインを辿り、徐々に目線を下げるど、僕の視界に恐ろしい光景が映つた。

机の前に大きく横たわつた物体。それは、血を流して倒れる司祭の姿だつた。

緋色のローブの胸のあたりに、明らかに布地の赤とは異なるドス黒い液体が染み出していた。

「あ……あ」

声にならない。足の力が急速に失われて、無意識のうちに尻もちをついた。歯の根がかみ合はずガチガチと音を立てていて。次第に目の前が霞み始め、僕の意識は遠のこうとしていた。

しかしその時、視界の隅に僅かに動く司祭の口元を見つけて、僕は気を取り戻した。まだ息がある！

「司祭様！」

僕は震える足でよろけながら必死に立ち上がり、慌てて司祭に駆け寄つた。仰向けに横たわつた司祭の背に手を差し込み、抱きかか

えようとするが、支える力を失つたその体を僕一人の力で持ち上げることは不可能だつた。

引き抜いた手に赤黒い液体がべつたりと貼りつく。よく見れば、血で汚れたロープの胸元には、鋭利な刃物で差し抜かれたような跡があつた。

司祭を貫いた凶器はおそらく胸から背にまで達したのだろう。背から溢れ出た血は白いタイル張りの床を真っ赤に染めていた。

全ての血液が流れ出てしまつたかのように、蒼白な顔面。虚ろなその瞳はからうじて開かれてはいるが、僕を見ているのか、いないのか。

僕は彼に一刻も早く手当てを受けさせてあげたかった。しかし、助けを呼びに行つていては間に合わない。その時、部屋のバルコニーに目が止まつた。王宮にあつたものと同じような窓のないバルコニーである。

そうだ、バルコニーから叫べば外の人に気づいてもらえるかもしれない。そう思つて立ち上がろうとした時、思いがけず強い力に引き戻された。

なんと司祭が、弱々しく投げ出されていたその手で僕の上着の裾をしつかりと掴んでいたのである。

彼の顔を見ると、目は光を取り戻しカツと見開かれていた。そして、口を何らかの発音の形に動かしているのが見て取れた。その口元は確かに何かを語ろうとしているのだ。

しかし、ヒューヒューと息が漏れるばかりで、声になつていない。「司祭様！ 司祭様！ しつかりして下さい！ 何を仰るつとしているんですか！？」

口に耳をつけるようにして、必死に司祭の言わんとする言葉を掴もうとする。すると、その口元から微かに声が漏れ始めた。

「魔界！ かた…かりました」

「魔界！？ 魔界への行き方がわかつたんですか！？」

僕の問いかけには答えず、司祭はなおも声を絞り出す。

「 プネーマー 」 が 、「 あゝ、へ を 」

同祭の声はかすれていって、上手く聞き取れない。

とは何だろ？

司祭は辛そうに肩で息をする。せつかく光を取り戻した瞳が、今にも閉じられようとしていた。それに、急に力んだせいだろう。胸元のドス黒いシミの上に、新たに真っ赤な血が吹き出てきた。

駆け出そうとするが、またも強い力に引き戻される。この状態で、どこからそんなに強い力が生み出されるのだろう。その瞳から光が失われつつあっても、僕を掴んだ手だけは絶対に放そうとはしない。

僕は悟った。彼は自らの死を覚悟してこらのだらう。その前にどうしても彼の責任を果たしたいのだ。

必死に司祭の肩をゆすり、彼の目が閉じられるのを阻止する。
「お願ひします！ もう少しだけ頑張つて下さい！ 『ぎょく』と
は何ですか！？」

僕の言葉が届いたのか、彼は再び目を見開いた。

一五九

「五……何事か？」

司祭は額く代わりに大きく息を吸つた。そして、今まで一番力強い声で言つた。

「魔界の封印……解ける」

「ネウマの鏡に宝玉を。魔界の封印が解ける。」

これが司祭の伝えたかつたことだらうか。これが、魔界への行き

方だと。

「そうですね！？」司祭様！」「

もはや返事はなかつた。そこまで言い終えた司祭は安心したように、静かに目を閉じた。

僕は司祭の体にすがりつき、必死に呼びかけ続けた。

しかし何度呼びかけても、どんなにゆすっても、閉じられた目が再び開かることはなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9070v/>

aiolos

2011年12月21日15時51分発行